
ウィッチ・ブルームクラフト

雛月詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィッチ・ブルームクラフト

【Nコード】

N1424D

【作者名】

雛月詩音

【あらすじ】

リクとアステルは魔女の卵。悩みはあれど、今日も元気にブルーム創りと魔法の修行に励んでいる。ところがある日、二人は師匠の魔女から「私はもうじき死ぬ」と予告され……。

一話（前書き）

作中、ややグロテスクな表現があります。苦手な方はご注意ください。

一話

ばきんっ、と金属の折れるいやな音。

「あーっ！」

少女のかん高い悲鳴が重なって、

「だから言ったのに……」

少年の呆れたような声が後に続く。

「あああ……」

かん、からからと、破片が床に落ちて軽い音を立てる。むなしい失敗の音だった。

崩れ落ちる少女。すこし涙目だ。

「ま、また法器^{フルム}の完成が遠くなっただわ……」

「だめだよアステル」

そんな少女に、少年は声をかける。まだ年の頃十五、六のようだが、見た目以上に落ち着いた様子である。白髪の彼は、穏やかで澄んだ目をしていた。

「……同じ材質同士で削ろうとしちゃ」

「うっ、うるさい、リクのせいだ！」

「ぼ、ぼくのせい？」

リクと呼ばれた少年は、赤くなって詰め寄る少女の剣幕に一步步引いた。少女 アステルはリクよりも、頭一つ分ほど小さい。視線を落とした彼の目の前で、彼女の白い長髪と、それを束ねる桜色のリボンがふらりと揺れた。

「わたしが乱暴だと言うからじゃない」

「確かに言っただけど」アステルがむきになるのが悪いんじゃない、というか自業自得だ、とリクは思った。けれど、口にはしなかった。

「やっぱり、そうじゃないの」

きつと、火に油を注ぐだけだ。

「うっ。せつかくの金剛鋼^{アダマン}が」

アステルは、哀しそうに砕けた金属を眺める。

「レン、怒るかなあ」

リクはいつも材料を採ってきてくれる、ちいさな少女の姿を思い浮かべた。想像の中でも、その表情は満面の笑顔だ。

「……怒りはしないと思うけど」

「けど、何よ？」

「材料はだいじにしたほうがいいと思うよ。とくに金剛鋼アダマンは貴重だし」

「い、言われなくても分かってるわよ。わたしだって、好きで折ってるわけじゃないんだから」

「そ、そうだよな」

ちよつと言い過ぎたかなと、リクは反省する。頭のリボンまでしぼんでそうに見えるほど、アステルは落ち込んだ様子だった。

けれど、彼女の立ち直りは早い。

「ううっ、諦めない！ 失敗したら、その回数だけ再挑戦すればいいことよ！」

これは彼女の美德だなと、リクは思う。

「よし、早速 あっ」

アステルが、ふいにおかしな声を出した。

その視線の先には、時計がある。

「あ」リクも思い出して、声を出した。

今日は模擬戦の修行がある日だった。

集合時間まで、あと一分。

ブルームの創作に没頭する余り、時間を忘れてしまっていたのだ。

「はっ、早く行かなきゃ！」

アステルは工具を放り出して練習用のブルームを引っつかみ、風のような勢いで部屋から出て行った。

「あ、待ってよ！」

リクも続く。アステル同様に、練習用ブルームを持っていくことを忘れない。

彼らにとって、ブルームは命と同じくらい、大切なものなのだ。二人は魔女の卵。今日もブルーム創りと、魔法の修行に忙しい。

+

薄暗い広間で、リクとアステルは対峙する。

「今日こそ勝つんだからね」

アステルは練習用ブルームの先端をリクに突きつけながら、そう布告した。

「はいはい」

言われたリクはどこ吹く風だ。

「くうっ。その余裕、消し飛ばしてやるっ」

ブルームを掴んで地団駄を踏むアステル。

放って置けばいつまでも続きそうなやり取りを制するように、幼い少女の声が響いた。

「はい、はい、お二人とも、準備はよろしいですね」

声の主は、アステルよりも更に小柄な少女だった。女中服に身を包み、床に届きそうなほど長い髪を頭の両脇から流している。

「いいわよ、レン」

「ぼくもだ」

少女は頷くと、手にした鐘を掲げる。

その瞬間、二人の目つきが変わる。ただの子どもから、鋭く透徹した修行者のものに。二人の間の空気が急速に澄み、張り詰める。

「では、行きますよ」

始まりを告げる、鐘の音が鳴り響いた。

サイドアイ

リクは額の第三眼に集中した。額から腕へと魔力の流れをイメージ、手にしたブルームにそれを導く。

対するアステルの額にも、光が灯る。鮮烈な緋色。彼女の握るリクと同型のブルームにもまた、魔力が満ちてゆく。

二人のブルームが変型する。

ただの棒でしかなかったものが、それぞれの意志、魔力のかたちに応じた形状へと。わずかな動作音を響かせ、一瞬の内に、変化は終わる。

リクのブルームは、外套のような形状に展開した。その先端からは六本の細い > 枝 < が伸び、彼の体を覆っている。リクの全身が彼自身の魔力の色、桜色に包まれる。その光は拡散し、淡い。

アステルのブルームからも同様に六本の枝が伸びるが、それは束ねられ、槍のように細く長い形となった。リクとは対照的に、その緋色の魔力は槍の先端に集中し、極めて強く煌々とした光を放っている。

初めに動いたのはアステルだった。

絹糸のように繊細な長髪を曳いて、彼女は駆ける。まだ十二の身からすれば驚異的な速度でリクに迫り、自身の身長ほどもある長大な槍を、一息に薙いだ。

リクは槍の軌道に枝を割り込ませる。交差。非実の火花を散らし、弾ける魔力。槍が逸れる。生じた隙を突いて、リクは枝による突きを放つ。アステルは間合いを取ろうとした。

その動きが不自然に止まる。

アステルは足元に違和感を覚えた。目はリクから放さない。見なくとも分かる、それはリクのブルームだ。胸元への突きとはべつの枝がアステルの足に絡み、彼女の動きを止めたのだ。

アステルは慌てて、槍の先端に集中していた魔力を再分配した。

大部分は槍の柄に。一部は直接リクの枝に叩き付け、すこしでも攻撃の勢いを殺ごうとした。

その甲斐あつてか、あわや命中するところだったリクの攻撃を、アステルはすんでのところかわすことができた。足に絡む枝を払って外し、今度こそ間合いを取り直す。

リクは深追いしない。

（相変わらず、アステルは容赦がないな）

彼は割合穏やかな性格なので、攻めにはどうしても消極的になってしまう。それ以上に、へたをすれば、アステルを傷つけることになってしまうのだ。それは嫌だった。

今使っているブルームは修行用のものとはいえ、基本的な機能については魔女たちが常用するものと変わりない。安全装置の類などついていないのだ。

「相変わらずぬるいわね。リク」

槍を構えなおし、額から緋色の光を撒き散らしながら、アステルは言った。いまだにすこし舌足らずなところが残っている声は凜として、よく通る。

可愛らしい声音に反して、その言葉は厳しい。

アステルは怪我するかもしれないとは思えないんだろうかと、リクは思う。彼女はいつも全力で攻撃しているように見える。彼女自身の気性を反映した結果だろうが、きれいに命中すれば、リクはただでは済まないだろう。

アステルはまだ未熟だから、当たらないで済んでいるけれど。

彼はその考えを、ほとんどそのまま口に出した。

「……アステルは相変わらず、がさつだね」

細く整った彼女の眉が、見る見る内に釣りあがる。おそらく頬も紅潮しているのだろうが、額に灯る緋い光に隠れて分からない。

口応えの代わりに、彼女は駆けた。一撃必殺の意志を反映して、槍の先端が強烈に煌く。直視すれば視界が奪われてしまいそうなほど眩いそれは、きわめてシンプルな攻撃衝動の表現だ。

そう、単純。ゆえに、御しやすい。

リクは殆ど魔力を込めない枝を一本、アステルの目の前に放り出した。彼女はほとんど条件反射でそれを薙ぐ。無抵抗で弾かれた枝の影から、次の枝が繰り出される。それもあっさりと払われる。

「ぬるいつて言ってんのよっ！」

気合一声、アステルは全魔力を乗せた一撃を、リクの胸目掛けて叩き込んだ

が、

次の瞬間、彼女は脳天に予想外の大衝撃を受けてよろめいた。視界がぶれる。一瞬の混乱の後に、頭上から不意打ちを受けたと察するがもう遅い。踏ん張り、一旦間合いを取ろうとするが、すぐに追いつきが来た。一度目よりも重い二撃目。

アステルは堪らず、石畳の上に倒れ伏した。手足にリクの枝が絡みつき、彼女の自由を奪う。ブルームまでもが取り上げられた。

またか、とアステルは思う。単純な挑発に乗って周りが見えなくなった。注意を逸らされ、奇襲に気付けなかった。いつもこうだ。リクは口がうまい。

許せない。

リクが、ではない。自分が。単純で未熟な自分が嫌だ。もっとうまく、魔法を扱えるようになりたいのに。マザーに認めて欲しいのに。こんなことじゃ、だめなのに。

「ああああっ！」

身の内から絞り出すような叫びを上げて、アステルは、魔力を練る。手足に絡むリクの枝を焼き切って、もう一度。やり直しを。

押さえつけて終りだと思い込んでいたリクは、その突飛な行動に対応しきれず、腕を束縛していた枝を外されてしまった。自由になった腕で、アステルはリクに殴りかかろうとする。驚いて目を睜り、後ずさって尻餅をつくリク。アステルはその隙に、いまだ足を縛っている枝を取り払おうとした。

そこで、二度目の鐘の音が鳴った。

「はい終わり、終わりですよ」

始まりの合図を鳴らした少女が鐘を乱打しながら、笑顔で二人の間に割って入る。

鐘の音によって強制的に魔力集中を解除されたアステルは、不満そうな目で彼女を睨みつけた。

「何よレン。もう少しだったのに」

レンと呼ばれた少女の笑顔には、何の変化も生じない。

「マザーの命令ですから」

その一言でアステルは黙った。

「それに、続けてもきつと、アステルさんの負けでしたよ」

「……うるさいな」

くちびるを尖らせ、アステルはそっぽを向いてしまう。

「大丈夫？ アステル」

リクが心配そうに声をかける。二度も強打してしまった頭を慮つてのことだった。

だが、アステルには、その態度が癪に障る。

「大丈夫よ。何ともないわ、あれくらい」

どうしても、棘のある応えになってしまう。そんな風に答えてしまっ自分も、すこし嫌だった。いつものことだからリクは気にしないだろうと分かつてはいても、アステルは胸がちくりと痛むのを止められない。

リクのことは嫌いじゃない。たった一人の兄弟弟子というのを抜きにしてもだ。だから、反抗的な態度を取ってしまうのは、単なる八つ当たりでしかない。リクにとってはいい迷惑だろうと思う。

だけど、悔しいものは悔しい。

「……二人とも、未だブルームの展開が遅い」

老婆のしゃがれた声が響く。広大な空間に余さず浸み入るような、存在感に溢れる声だった。

声の源には、枯れ木のようなシルエットがある。

マザー・タタリ。

二人の師だ。物心ついた頃からずっと、彼らにブルーム創りと魔法の業を教えてきた偉大な魔女。

「アステル」

「は、はい」

そのしゃがれ声で名を呼ばれると、条件反射的に身が竦む。アステルたちにとってマザーは育ての親と呼べる存在だったが、それ以

上に、厳しい魔法の師匠なのであった。

「心を鎮めよ。魔力を精密に制御するには、凧いだ心が不可欠なのだ」

「……はい」もう何度も言われたことだ。なのに実践できていない自分に、自己嫌悪が深まる。

「言葉を発するのも、必要なときのみに留めよ。付け入られる隙となろう」

「はい……」マザーの言葉は常に正しい。事実、自分の発言がリクの挑発を誘発し、結果的に敗北を呼び込んだのだ。

「だが、魔力量そのものは極めて大きい。正しい制御法を身につけるべく、今後も精進せよ」

「は、はい。ありがとうございます」

その後もマザーはいくつか、注意点を述べる。魔力を使うときはブルームを通せ。いたずらに魔力の再分配を行ってはならない。その他、微に入り細を穿つ指導が続いた。

「リク」

「はい」

「お前は逆に、魔力制御に長けてはいるが出力の絶対値は大きくない。今はまだ良いが、高度な術の実現を目指す際には障害となるだろうことを、心に刻め」

「……はい」

そうになったのは、天性による部分もあるだろう。だがそれ以上に、修練相手がアステルであるのが主因ではないかとリクは思っている。「繰り返しによって相手を乱すのは、良し。今後も精進せよ」

「分かりました。マザー」

言うべきことを言い終えると、マザーは立ち去った。

「……最近、戻るの早くなった気がしない？ マザー」

すこし不安そうな様子のアステルである。あまりにも出来が悪いので、愛想をつかされたのかと不安になったのだ。

それが分かるリクとしては、簡単には肯定したくない言葉だった。

だが、マザーが彼らの指導に費やす時間が短くなりつつあるのは、確かな事実だ。

リクの逡巡をよそに、レンが答える。

「近頃、マザーの研究は佳境を迎えているんですよ。だから、忙しいのです」

「へえ……そうなんだ」すこしほっとした様子のアステルである。

「研究か」

リクたちは、マザーの研究を実際に見たことがない。自分たちには及びもつかない魔法の秘儀なのだろうと、想像を膨らませているだけだった。

「だから、アステルさんが心配しているようなことは、ありませんよ」

「う、うん」

見透かされたアステルは、すこしうつろたえた様子で返事する。

レンは、相変わらずの笑顔だった。

「はい、では食事にしましょうか。もう用意は出来ていますよ」

二話

リクたちは修練のための広間を出て、生活部屋へと向かう。石造りの階段を上り始めると、壁にしつらえられた魔力灯が一斉に灯る。階段の隅、段と段の狭間には、灯りに照らされない暗闇がわだかまっている。

木製の扉を開けて、二人は自室に入った。蝶番が軋みを上げる。開閉時につるさいので、油を注ささないといけないなとリクは思うのだが、日々の色々なことに流されていつも忘れてしまう。部屋の中にはいい匂いが満ちていた。

「今日は白雪うさが獲れたので、兎まることスープです」
レンが長い髪を揺らしながら、嬉しそうな声でそう言った。

「わあ、白雪うさが！ よく獲れたね」

「ええ、たまたま寂し死にするところに出くわしまして。運がよかったです」

ぐうと、誰かのお腹が鳴る。アステルがすこし、顔を赤くした。

リクは聞こえないふりをしながら卓につく。

「アステルさん、すこしはしたないですよ」

笑顔で言い放つレンの頭を、アステルは軽く引っぱたきながら卓についた。

「仕方ないでしょ。修行がきびしいんだから」

アステルはパンをちぎってスープに浸してからかじりつく。おいしい。

「アステルはいつも、全力だよね」

「リクは全力じゃないの？」

リクはスープだけをすくって口に入れた。お腹が温かさに包まれる。

「いや、全力だけど……何というか、遠慮なしというか」

「リクはわたしに遠慮してるの？」

アステルの眉がひそめられる。その視線は、遠慮なんかしたら許さないわよ、そう言っているように見えた。

「そういうわけじゃないよ。ただ、その……」

伝わらないなあ、とリクは思う。でも、アステルの懸念も理解できる。リクだって修行のときにアステルに手加減されたら、嫌だ。しているようには全然見えないけれど。

だけど、それとこれとは別の問題だ。魔法の修行は全力でやりたいけれど、アステルのことも心配なのだ。

「はつきりしないわね。いつものことだけど」

アステルは、余り深く追求しない。

しばらく話しながら夕食を採っていると、

「あーあ、もう練習用のブルーム使うのも飽きてきちゃったわ」

アステルが最近定番となりつつあるぼやきを放った。

「そうだね」

リクは簡単に同意する。

二人は、部屋の隅にある作業場に目を向けた。

魔力仕掛けの旋盤、フライス等の工作機械に囲まれて、二人それぞれの作りかけのブルームが置いてある。

> 法器^{ブルーム} < とは、魔女が魔法を行使する際に使用する道具のことだ。

一人前の魔女は、それぞれが専用のブルームを持っている。

ブルームがなくても、魔法は顕せる。だがブルームを使うことでより複雑・高度な魔法の行使が可能となる。ブルームは魔力の増幅器であり、変換器。ブルームを通じて魔力を増幅し、思う通りに変化させ、魔女たちは自分だけの魔法を操るのだ。

いかに魔力を増幅・変化させるかは、ブルームごとに　つまり、魔女ごとに異なる。ブルームの性能及び特性が魔女の大部分を特徴付けるので、名のある魔女の通り名にはブルームの名が冠されることが少なくない。

二人はまだ、自分だけのブルームを持っていなかった。

目下、製作中である。

しかしブルームの扱いそのものには慣れておく必要があるため、今はマザーが作った練習用のブルームで修行している。

「早く欲しいよね。自分だけのブルーム」

「うん」

まだ全工程の半分も踏破していない作りかけのブルームは、現時点では何の機能も発揮しない。がらくたと変わりないのだ。

「でも適当に作って、だめなものが出来てもいやだしなあ……悩みどころだわ」

「難しいね。だめなもの作ったら、マザーも哀しむだろうしね」

「うん……」

答えつつ、リクは気分が沈んでくるのを感じる。

リクには、悩みがあるのだ。

ブルーム創作に関する、大きな悩み。

「よし、こうしちゃいれないわ。ご飯終わったら、ブルーム創りましょ」

「うん、そうだね」

悩みはあれども、手を動かさないことには始まらない。リクはそう思っているから、アステルの提案には賛成だった。

しばらく話していると、食事が始まると同時に出て行ったレンが戻ってくる。

「食事はお済みですか？」

レンはいつも、測ったように食事が終わるタイミングで帰ってくる。

「では、こちらを」

そう言っただけで彼女が差し出したのは、奇妙な色をした薬剤。黒ずんだ丸薬が三種六個と、色とりどりの粉薬が四種。中には奇妙な光を放つものもあり、またあるものは強烈な臭気を放っていた。

二人は当然のようにそれを受け取り、口に運ぶ。

マザーから処方される、魔女のための薬だ。

「……ふう」

水の入った杯を置き、薬を飲み終えた二人は息をつく。

レンはその様子を確認すると、笑顔で二人に挨拶する。

「では、おやすみなさいませ……ブルーム創りも結構ですが、夜更かしすぎて寝坊などなさらぬよう」

まるで子ども扱いのレンに、アステルがふくれて反論する。

「しないわよ！寝坊なんか」

リクはその様子を見て、苦笑いを浮かべた。

+

夜になると痛みが襲ってくる。

薬の副作用だ。

体中が痛む。骨が軋むような音がする。体の表面を無数の蛆蟲が這いまわる感じがする。皮膚が剥離して血が滲むような気がする。目を閉じると、そんなふうに悪夢が現実に取り出さるようになる。

だが、目を開ければ、体には何の変化も起きていない。

それでも痛みだけは本物だ。彼らの覚えている限り、この痛みが訪れなかった夜はない。

分かっている。魔女には魔力が必要だ。そして、痛みが魔力を強めてくれる。だから二人は、魔女にとってこの痛みは普通のことなのだと思っている。排泄欲求のような、誰にでも訪れる生理現象に近いもの。偉大な魔女になるには避けられない道なのだと、とうの昔に受け容れている。

ときどき、耐え切れなくなることはある。

だけど、彼らは一人ではないから、そんなときは手を取り合って夜を越えるのだ。

朝になれば、嘘のように痛みは引くから。

+

二人の朝は、レンと顔を合わせるところから始まる。

「おはようございます!」

いつもそう言っつて、レンは油の差されていない扉を盛大に軋ませ、部屋に入ってくる。相当にうるさいのだが、それで目を覚ますのはアステルだけだ。リクは寝起きがとても悪い。

だから、アステルが目覚まして初めにすることは、リクを起すことだ。

「リク、起きて。朝よ」

たいてい揺すった程度では起きないので、何らかの対策を講じることになる。

最近の定番は、耳元での囁きだ。

アステルは右耳、レンは左耳につき、二人でタイミングを合わせて「起きなさい」と囁く。叫ぶのではない。あくまで囁きだ。

これをやると、なぜかリクは飛び起きる。叫ぶよりも効果が高いことは、実証済みだ。

今日もまた、リクは一瞬で目を覚ました。耳を押さえて、体を微妙にくねらせながら

「もう、やめてよ」

という。

アステルは「すぐ起きないのが悪いんじゃない。自業自得」などと返すものの、正直リクが何をそんなに嫌がっているのか分からなかった。

レンだけが、分かっているのかいないのか、代わらない微笑を浮かべて佇んでいる。

そして身支度、朝食を採り、二人の修行が始まるのだ。

+

とくべつに修行がないとき、二人の日常はほとんど法器創りに費やされる。

「あーっ！ また折れた！」

アステルの悲鳴は、だから、日常茶飯事だ。

「なっ、なんでーっ……」

両手を床に突き、壊れた部品を前にして、いつものように嘆くアステルである。

マザーが部品を拾い上げ、点検する。

「この軸受部分の強度が足りぬ」

一瞬で問題箇所を特定、指摘。

「で、ですがマザー」

自分の間違いを認めたくないアステルは、何とか反論を試みる。

「そこを強化すると、軸とこちらの外装がぶつかってしまいます。

強度は、魔力を流せば補えるかと……」

無謀な試みだった。

「機械設計で十分補償できる。 不要な部分に魔力を割くのは、愚かなことだ」

「はうっ」

撃沈。

一刀両断である。

こうして彼らは、マザーの指導を受けながら、自分のためのブルームを一から創ってゆくのだ。

ブルームの創作は、一筋縄ではいかない。

高度な魔法を実現するには、注いだ魔力を効率よく増幅・変化させる必要がある。ブルームの出来が悪いと、想定外の場所で魔力の流れが阻害され、思うように魔法が扱えないのだ。

また、仮に効率よく魔力を流せたとしても、ブルーム自体の物理的・魔法的な強度が低いと発動した魔法に耐えられず、自壊してしまう。

高性能なブルームを創造するには、「高効率魔力伝導」と「物理的・魔法的強度」を兼ね備えなければならない。これら二つを両立するには、軸・歯車・蝶番などの機械要素への精通、金剛鋼アダマンや真銀ミスリル、とねりこの木といった材料についての知見、魔法工具の扱いに関する熟練、またそれらを包括する魔法工学の修得　広範囲に渡る高度な知識・技能が不可欠だ。

「うっ、難しい」

アステルは頭を抱えた。また、設計のやり直しだ。

偉大な魔女への道は、まだまだ遠いようだ。

一方、リクは魔力駆動の工作機械にとりつき、部品の作製を行っている。ブルームは螺子や発条などの機械要素の組み合わせだが、その機械要素自体も自ら作り出さねばならない。一説によれば、そうして作り出す過程において製作者の魔力が部品に染み込み、ブルームと術者の結びつきを強めるのだとも言われている。

リクの目は真剣そのものだ。

工作機に固定され、高速で回転するエニシダの木に、ゆっくりと切削刃を近づけていく。切削刃も工作機に固定され、工作対象この場合はエニシダの木　との相対位置は、高精度に制御が可能だ。

刃が木材の表面をなぞり、思う通りの形を切り出してゆく。

「……ふう」

やがて加工が完了し、リクは出来上がった部品を点検した。ノギスを当てて、正しい寸法が守られているかをチェックする。

「あれ」

一箇所、ミスが見つかった。これでは所定の強度が出ずに、ブルームが壊れてしまうだろう。

いつもは失敗しないような作業だった。どうも最近、調子がよくない。悩みのせいだろうか、と思う。

「……はあ」

リクは、ちいさくため息をついた。貴重な材料と創作時間を無駄

にしてみました」。

「ごめん、レン」

「いいですよ。材料は、また採ってくればいいですし」

ブルーム創作に必要なあらゆる材料は、レンが外から採ってきている。レンが居るから、リクたちは部品の加工や構想設計といった、より核心に近い作業に集中できるのだ。

身の回りの世話をしてくれていることも含め、リクもアステルも、このちいさな援助者に頭が上がらないのだった。

（それにしても、どうしよう）

失敗した部品を眺めながら、リクはそんなことを思う。

もうすこし創作が進む前に、悩みを解決しなければならぬ。

いまリクとアステルが創っているのは、全てのブルームに共通する「核」の部分だ。核の構造はほぼ決まっていて、あまり魔女ごとの個性は出てこない。ブルームの歴史の積み重ねそのままに、あらかた決まった手順に従って創作していけば完成する。だから、難しくはあっても、いずれ完成するだろうという見通しはついている。

問題は、その先にある。

核が完成した後に待っているのは、ブルームの個性を決める部分の創作である。いかに魔力を増幅し、変化させて、望み通りの魔法を発現させるか。ここにおいて、魔女の創意工夫は最大限に発揮されるのだ。

魔法の可能性は無限だから、その創作方法に決まった手順はない。

だからこそ、悩ましい。

そう、どんなブルームを創るか

それこそが、リクの悩みだった。

今はまだいいが、核が完成するまでには決めないと、ブルームの創作が頓挫してしまう。

レンの言うとおり、材料は集めてくればいいし、失敗してもやり直せばいいのかもしれない。だが、どう創ればいいのか決めていない

のでは、完成などするはずがない。

リクは人知れず、ため息をついた。

しばらく折れた材木を手に呆然としてしていると、アステルに声をかけられた。

「ねえリク。これ、どうかな」

どうやらマザーは、自室に戻ったようだった。

アステルの手には、組み上げられた機械の腕のようなものが握られている。

「仮組みしてみたんだけど」

そう言つと、アステルは魔力を流し込んだ。彼女の額が緋色に光る。呼応して機械の腕が動いた。歯車が擦れ、発条が伸縮するかすかな動作音が、リクたちの耳朵をうつ。

「うわあ、ちゃんと動いてる。すごい」

「ふふ」

「あれ、ここちよつときこちなくないかな？」

「え、どこ」「がぎん。」「あ」「あ」

また、折れた。どうやら、可動範囲が限界以上に広く取られていたらしい。

「……」涙目のアステル。

「……また、頑張ろう？」

苦勞して組み上げた機械が壊れたときの気持ちは痛いほど良く分かるのだが、リクにはうまい言葉が見つからなかった。

「一緒に原因と、対策を考えよう。次はきつとうまく行くよ」

「……うん」

ようやく頷いてくれたアステルに、リクはすこし安心する。

ブルーム創作に必要な魔法工学には、リクのほうが深く通じている。だから、こんなときはリクが主導権を持つのが常だ。

アステルは行動派であつて、余り学問は得意ではなかった。逆にリクはどちらかというと学者肌である。

また、リクはアステルよりも三歳年上だ。リクのほうが魔法工学

に関する理解が深いのも、その意味では当然のことかもしれないかった。

「ここに載ってる強度計算はした？」

「……ううん」

二人でひとつの教科書を見ながら、ブルームの完成を目指して歩いていく。こんなとき、リクはすこしだけ悩む辛さを忘れられる。アステルを助けることは、彼の心を満たしてくれるのだった。

三話

ブルーム創りと魔法の修行に明け暮れる、二人の小さな魔女の卵。その道は険しいもので、何度もつまづき、挫けそうになったこともある。だが、彼らは一人ではなかったし、何より支えとなってくれる師匠がいる。

言葉少なで、けして優しいとは言えないが、常に的確に二人を導く偉大な魔女。

マザー・タタリさえいれば、二人はいずれ卵から孵り、一人前の魔女になれると信じている。

+

「リクさん。アステルさん。マザーがお呼びですよ」

何故だかその日、二人を呼びに来たレンの態度は、いつもと違って見えた。

「レン、何かあった？」

アステルの問いに、レンは不思議そうに首を傾げる。

「いいえ？」

「そう？」

気のせいだろうか。

どこことなく不安なものを感じはしたが、二人はすぐに違和感を忘れてしまった。

ブルーム創作の途中だったが、マザーの召集のほうが優先事項だ。二人とも、進行中だった作業を中断してマザーの下へ向かう。

「マザー。リクとアステル、参りました」

リクは面会部屋への扉を開けて、そう報告した。

マザーがリクたちと話すための部屋だ。机と椅子があるだけの、簡素な部屋。しかし魔女の塔らしく、部屋の四方を構成する石材に

は耐魔力性の呪句がしつかりと刻み込まれている。

マザーは奥の椅子にかけていた。極めて静かに、まるで死んでいるかのように。しかし、静謐でありながら、そこには異様な迫力が同居している。静と動。死と生。相反するものを共存共栄させるような、一種矛盾した空気が漂っている。

それはマザーの、矛盾さえ捻じ伏せる強大な魔力に由来するものであった。

リクもアステルも、恐るべき存在を前に、体が緊張するのを押えられない。マザーを前にするといつもこうだ。魔女の、魔女たる所以を、彼らは頭ではなく身体で理解する。

「かけるがいい」

その声に逆らうことはできない。リクたちは椅子を引き、腰を下ろした。

「今日は、お前たちに告げねばならぬことがある」

「……何でしょうか」

マザーはかすかに、頷いた。

「私はもうじき、身罷る」

聞き間違いかと思った。

「今、何と？」

だから、リクは聞き返した。

「私はもうじき、死ぬのだ」

「……そんな」

アステルが掠れた声で呟いた。

マザーは確かに、死ぬ、と言った。聞き間違いではない。マザーが冗談を言うなど有り得ない。だから、それは本当のことなのだ。しかし、二人にとって、即座に受け入れられることではない。

「なぜですか？ なぜ、マザーが」

うつたえる心のまま、リクは問うた。

マザーの答えは簡潔極まりなかった。

「時が来たのだ」

分からなかった。それでは何も分からない。

「どういう意味でしょうか。時が来た、とは」

「私の研究が、完成した。それは、我が肉体の滅びを意味している。近い将来、私は死ぬ。これは既に、確定した未来なのだ」

リクもアステルも、衝撃の余り言葉を失った。

マザーはそんな二人に構わず、言葉が続ける。

「お前たちは、一人で立たねばならぬ。私が亡き後、お前たちは自ら学び、自ら試行錯誤し、自ら高みへの道を歩まねばならぬ。だが、お前たちは未だひとつのブルームも完成させておらぬ身だ」

マザーの放つ気配が、すこし和らいだような気がした。

「急ぐのだ。私が生きている内に、ブルームを完成させるのだ」

リクもアステルも、はっとしてマザーの瞳を見た。

師の瞳は、いつものように、怖ろしくも強い光を宿している。

だが、今はそこに、大きな優しさも宿っているように見えた。

「私は、お前たち自身の創り上げた、ブルームが見たい」

「マザー」

アステルは、思わず椅子から腰を浮かせた。

「わたしは、まだまだ未熟者です。まだマザーの導きが必要なんです。まだ」

「アステル」

リクはたまらず、アステルを制止しようとした。

だが、リクよりもマザーが口を開くほうが早かった。

「アステル。私たちは、何だ？」

アステルは、ぎくりとして答える。

「はい。わたしたちは…… > 魔女く です」

「その通り」

それは、よくマザーが投げかける問いだった。

マザーは、続ける。諭すように、重く、静かに。

そしてリクもアステルも、その言葉一言たりとも聞き逃すまいと、

全霊を集中させた。

「ブルームと共に生き、ブルームと共に在る者。魔力を操り、妖しの奇跡を起す者。俗世の民の及びもつかぬ、遥かな高みを臨む探求者。」

私たちは > 魔女 < だ。

魔女に情は要らぬ。私たちは、その本質において孤独でなければならぬ。師弟など、形だけのものだ。かような感傷に流され、高みへの歩みを止めてはならぬ。探求の邪魔になるものを捨てよ。歩むために必要なものだけを抱け。常に高みを目指して歩め。それこそが魔女の矜持と知るのだ」

マザーは、穏やかな、しかし断固とした口調で二人を諭す。

リクも、アステルも、反論の言葉など持ち合わせていなかった。

+

リクは目を閉じ、あぐらをかいて、両手を胸の前に突き出している。十指は複雑なかたちの印を結んでおり、それは時折すばやく、組み替えられていた。

魔力制御の修行だ。

額の第三眼^{サードアイ}が、煌と輝く。人の身に宿る、現実の理を歪めて支配下に置く力。魔力を練り、流れを制御し導いて、サードアイから外界へと顕現させる。

魔力は、誰にでも存在しているという。

だが、通常は個人の内部を巡るだけで、外界へは影響を及ぼせない。

魔力を外界へ干渉させる。つまり、魔法を行使するためには、内から外へと通ずる。 > 径^{パス} < を開けねばならない。

それが、額のサードアイである。魔女と通常の人との最大の違いは、このサードアイにあるとも言えた。

リクのサードアイが、桜色に輝く。そこから光の線が伸びる。輝

線はリクが指を組みかえるに従い、折れ、曲がり、中空に複雑な紋様を描いていく。

あらかじめ決められた図形を、魔力で紡いだ輝線でなぞる修行だ。図形は複雑であり、繊細な魔力制御が求められる。

リクの描く魔力線は、極めて精確かつ高速に、定められた図形を描く　はずだった。

（　だめだ）

わずかに、輝線がぶれる。定められた軌道から外れ、揺れる。

図形が乱れ、消えてしまった。

それほど難易度の高い図形だった。彼はこれまでに何度も描画を成功させている。なのに、今はそれが、できない。

「リク。調子、悪いね」

声が聞こえて、目を開く。

アステルがいて、顔を覗き込んでいた。

「……まあ、ね」

「やっぱり、マザーのこと？」

「うん」

「……本当なのかな。ううん、本当だよね。マザーが冗談とか嘘とかで、あんなこと言うわけないもんね」

「……うん」

「どうしよう」

アステルは、リクの隣に、膝を抱えて座りこんだ。

とても不安そうに、床に視線を落としている。

「マザーが、いなくなっちゃうなんて、わたし……」

ここまで元気をなくしたアステルを、リクはほとんど見たことがなかった。ただ、彼女の気持ちはよく分かる。マザーはアステルにとって、唯一の親のような存在だから。

「ぼくだって、不安だよ」

リクはそう言った。紛れもない本心だった。

まさに晴天の霹靂、天地が崩れるかのような大事件なのだ。

未だに信じられない。だが、アステルが言う通り、嘘や冗談では有り得ない。マザーが言うことに誤りはない。マザーが死ぬというなら、それは本当のことに違いない。

「……早く、一人前になろうよ」

そう、マザーがいなくなるならば、リクたちにできることは一つしかない。

一刻も早くブルームを完成させて、マザーに一人前と認めてもらう。

「うん。そうだね。それしかないんだよね、結局。わたしたちは……魔女の卵なんだから」

アステルは拳を握り締めて、決意を固めるようにそう言った。

一方でリクは、焦りが募るのを感じる。これまでとは比べ物にならない焦りだ。

早く、どんなブルームを創るか、決めなければならない。

ここに至って、初めて気付く。もしかして、自分には甘えがあったのだろうか。マザーがいなくなるなど有り得ないと、それこそ有り得ない幻想に縋って研鑽を怠っていたのではないかと。

（いや）

リクは首を振る。後悔している場合ではない。今までが駄目だったなら、これから直していけばいい。というより、直さなければならぬのだ。

「アステル。ごめん、修行の途中だったから」

まずは心を落ち着けなければ。魔力制御の修行は、うってつけの方法だ。

「うん。分かった。頑張ろうね、お互いに」

リクは頷く。再び十指を組み直し、彼は自己の内部、魔力の流れに集中した。

今度こそ、彼の描く魔力輝線は、精確な図形を描き出した。

アステルはその様子を、憧憬と、一抹の嫉妬を交えて眺めている。

リクよりも、もっとマザーに認められたい。そんな想いが、アステルにはある。これまでずっとそうだった。

しかし、マザーはどうも、魔力の絶対量そのものよりも、魔力制御の正確さをこそ重視しているように思えるのだ。

これは由々しき事態である。魔力制御においてはリクに長がある。マザーは二人を比較して優劣をつけることなどしないが、アステルにとっては兄弟子に当たるリクの評価は、極めて重大な関心事なのだ。

いま、リクは美しい立体魔法陣を描いている。

桜色の綺麗な立体図形が、闇の只中に浮かんでいる。

自分には、絶対に描けない正確さだった。

言い訳ならいくらでも思いつく。リクのほうが年上。男の子のほうが細かい作業は得意な傾向にある。性格的な問題。

でも、だから何だというのかと、アステルは思う。自分よりもリクのほうがマザーに認められているというのが問題なのであって、何故そうなのかというのはどうでもいいことだ。分かっている。このもやもやした気持ちを払うには、自分がリクよりもうまく魔力を扱えるようになるしかないことは。

そしてそれができないから、こんなにくるしい。

しかも、マザーはもうすぐ、いなくなってしまう。もうチャンスは、あまりない。

アステルは目を閉じ印を組んだ。

リクに出来るんだから、自分にだって出来るはずだ。

そう信じて、サードアイに集中する。自らの内に、荒々しい流れを感じる。力強くうねる、緋色の洪水。それを額の径に導くと、い

つも激しく溢れ出す。

勢いのある流れは、制御が難しい。

リクよりも強く輝く緋色の輝線は、定められた線分の長さを越えて、直線に走った。いや、直線でさえない。わずかではあるが、ぶれていた。

「……できない」

口の中だけで呟き、中断。再開する。今度はすこし、うまく行った。いや、これまでで一番出来がいいかもしれない。機嫌を直して、魔力の描画を続ける。

完了し、アステルは目を開けた。

いま、部屋には、アステルの描いた立体図形と、リクの描いたそれが両方、浮かんでいる。緋色と桜色の立体図形。色こそ違えど、形はそれぞれ、同じものだ。

同じものはずだった。

注意散漫な者が見たなら、それらは同じものに見えたかもしれない。だが、アステルたち魔女の卵にとっては、まさに一目瞭然の違いであった。

「……」

アステルは唇をぐつと引き結ぶ。

リクには敵わない。

修行する度に湧いてくるその気持ちを、今もまた、抑えないといけなかった。

四話

マザーが自らの死を予言して、数日が経った。

その日、二人が与えられた魔法の修行課題は、すこしいつもと違っていた。

「二人で協力して、ですか？」

幻獣との模擬戦を行う修行。それを、二人で共に行えという。

幻獣相手の戦闘修行じたいは、二人とも何度もこなしてきた。しかし、二人で協力して一体の幻獣と戦えというのは、初めてのことであった。

この未知の課題に対して、アステルは
(チャンスだ)

と思った。リクと共に行うこの修行で大きな手柄を立てれば、マザーの評価はぐっと上がるに違いない。しかも目的は幻獣打倒。魔法の攻撃的な側面を得意分野とする自分としては、これは千載一遇のチャンスに違いない。

アステルは心中で密かにほくそ笑む。

対照的に、リクの表情は不安げだ。

幻獣との戦闘が不安なわけではない。確かに危険な修行ではあるけれど、これまでに何度もしてきたことだ。なのに何故不安なのか。マザーが死を予告したこと、無関係ではないとリクは思う。精神的に動揺しているのだ。だから、新しいことに対して、妙な不安を感じたりする。

「マザー。その幻獣とは、どのようなものなのでしょう」

不安のままに、リクは質問を投げていた。

だが、マザーは明確に答えない。

「その特性を判断し、的確に対応することも修練の内ゆえ、詳細は言えぬ。だが、油断すれば大きな傷を受けることにもなる。重々注意せよ」

「はい……」

リクにとって、その答えは予想の内だった。ゆえに驚きこそないが、結局不安は解消されない。彼の返答する声は、より深く憂鬱に沈んでいくようであった。

マザーの言葉が重く響く。大きな傷を受けるかもしれない。危険な修行だ。

当然である。まさにその為に修行しているのだ。命の危険が大きければ大きい程、魔法の力はより強く、鋭く、磨き上げられる。魔力とは生命力。人の身に宿る神秘、生命がもたらす特別な力だ。なればこそ、進んで死地に身を投じることが、短時間で魔法を上達させることに繋がるのだ。

そうだと、分かっている。

……自分が傷付くだけなら、まだいい。

だが、アステルが傷付くのは。

(守ろう)

そう、リクは強く思った。これまでとは違う、二人一緒なのだから、自分がアステルの盾になればいい。そうすれば、アステルは傷付かない。

二人それぞれに思う中、マザーは修行の開始を告げる。

「始める」

マザー・タタリは、自身のブルームを掲げた。巨大な棒の先端に、枝のような何かが大量に密集した形。例えるなら筭だ。リクたちの持つ練習用のブルームを、より一層複雑高度に改造するとこのような形になるかもしれない。いや、むしろ、リクたちのブルームが、タタリのブルームを簡略化したものなのだ。

ウィザード
> 枯れ筭^{サイドアイ}。それがタタリのブルームの名だ。

タタリの第三眼が光る。額から漏れる光は、偉大なる魔女という呼び名からは想像もできない程に、弱い。

しかしそれは、タタリの魔力が弱いことを表さない。

その意味するところは、魔力制御の精密さだ。

サードアイの光は魔力の光。しかし、その光そのものは、何らの魔法も顕さない。つまり、サードアイから漏れる光は、魔力の損失、浪費なのだ。

高位の魔導師たちは、その精緻な魔力制御術で、魔力の浪費を最小限に抑えている。ゆえに、何の効果も持たぬ光などは殆どの場合、一切生じることはない。

それにも関わらず、今タタリの眼から淡く光が漏れているのは、これからタタリが行使しようとしている魔法の規模の巨大さゆえだ。リクとアステル、二人の人間を取り込むための幻界の顕現。及び、幻獣の召喚。一つ一つ高度な魔法であるそれらを二つ並行して発動し、かつ精密に制御しようとしているのだから、いかに超高位の魔女と言えども魔力制御にむらが出来てしまうのだ。

タタリのブルームが変型する。一切の音を立てず、>枝< が伸びて二人を囲う。得体の知れぬ材質から成る、複雑怪奇な神秘の魔道具。絡み合う軸・歯車・螺子・発条、歪に節くれだったその構造は、まるでタタリ自身の体躯のようにも見えた。

リクはそのとき、>実感< した。これが、魔女なのだ。ブルームと共に生き、ブルームと共に在る者。その言葉の本当の意味。高みを極めた魔女にとって、もはやブルームは単なる道具ではない。己の体そのものなのだ。

二人を囲むブルームの枝が、わずかに囁くような音を立て始めた。同時に淡い白光が広間を満たす。

リクとアステルの視界が歪む。

一瞬の目眩、酩酊感、視界が完全な闇に閉ざされ、気付いたときには幻界への移動が完了していた。

そこは静かな森だった。

うすい白霧に包まれた、異形の森。

地面近くは特別に霧が濃く、ねじれた木々の根、現実には存在し

ない不気味な植物たちが、その中にぼつぼつと浮かんでいる。まるで霧海に沈む島々のようだった。

風はない。

のみならず、本来森にあるべき一切の音が、聞こえてこなかった。マザーの作り出した修行の舞台、幻界である。

「……よし」

アステルがちいさく呟いた。口に出すことで気合を入れ直そうとしたのだろう、だがその声でさえ必要以上に大きく響き、リクは若干不安になった。

葉擦れはない。動物たちの気配も感じられない。時間が止まったような静寂。

だが、異常な静寂そのものは不思議ではない。ここはマザーの作った幻の世界ゆえ、不要なものは存在していないのだから。

不安を感じるのは、ここに居るはずの、自分たち以外の生物幻獣の気配が感じられないせいだ。

霧のせいで視界がよくない。奇襲を受ける可能性がある。早々に位置を把握しなければならなかった。

リクは幻獣の気配を探查するため、サイドアイに集中した。

隣のアステルはすでに魔力を解放し、額に強い緋色の光を灯している。だが、ブルームはまだ展開していなかった。索敵のような地味な作業はリクに任せるつもりなのか、それとも索敵自体が頭になるのか、彼には分からない。

リクはブルームを展開する。棒状のブルームの先端から六本の枝が伸び、放射状に広がった。そこから六方に魔力の「糸」を伸ばしていく。伸びる先に何か魔力的な異常があれば、糸が切れるようになっていく。つまりこの場合、糸が切れた方角に幻獣がいる可能性が高いと言えるのだ。

伸ばした糸が 切れた。

だが、これは……。

「近い！」

リクは叫んだ。まるでそれに応えるかのように、獣の咆哮がリクたちの鼓膜を震わせる。

前方の木々を割り裂き、霧を吹き払いながら、それは姿を現した。双頭の獣だった。右側に獅子、左側に竜の頭。体躯は大きく、獣の頭はリクよりも体ひとつ分ほどもある。力の漲る前肢で太い樹木を踏みしだき、破壊衝動に満ちた四つの眼で、それは二人を睥睨していた。

（大きい！）

リクは心中で叫んだ。これまでの修行で戦ってきた幻獣に比べると、大きさも、迫力も、放つ妖気も、何もかも段違いだ。戦慄が臓腑を駆け下りる。

刹那動きを止めたリクの耳朵を、少女の叫びが打つ。

「やってやる！」

アステルだ。

緋の光が一際強く、霧に返って場を赤々と照らし出した。手中のブルームはすでに槍への変型を終え、敵を貫く意志を示している。

「待ってアス」　「リクが制止をかける頃には既に、アステルは幻獣に飛び掛っている。魔法で強化された大脚力で跳び、一刺しで仕留めんと槍を構える。

「死ねっ！」

狙うは獅子の左眼。緋い槍の穂先がそれを貫き、幻獣は血を撒き散らしながらのたうちまわる　そんなイメージが彼女の中に展開された。

しかし、それは実現しない。

「危ない！」

アステルは突然、腹部に巨大な衝撃を感じた。そのまま強引に、後ろに引つ張られる。かは、と息が漏れる。リクがやったのだとすぐに悟る。何故邪魔を。そう叫ぼうとした彼女は、強烈な熱気に言葉を失した。

つい半秒前までアステルが居た場所を、炎の柱が通過したのだ。

ブルームの先端がわずか、炎に飲まれる。ブルーム自体はその程度では破壊されないが、伝った熱量が余りに大きく、手放しかけてしまう。魔法を発動、アステルはかろうじて熱を中和し、ブルームを手放す愚を避けた。

「もつと慎重に」

「分かつてる！」

またリクに助けられてしまった。落ち着け。落ち着かなければならない。アステルは何度も自分に言い聞かせる。確かにこれまでの幻獣よりも強力かもしれないが、それが何だと言うのか。やることに変わりはない。ただ、敵を屠ればいい。

咆哮を轟かせ、幻獣が突進してきた。リクの反応が鈍い。アステルはリクの襟首を掴んで、全力で脇に跳んだ。二人の眼前を通過する巨大な暴力。木々が折れて倒れる、おぞましい音がそれに続く。

巻き込まれたら、と思うと背筋が凍る。分かつてはいるが、命がけだ。

通過した幻獣の背後が見えた。その身体は大部分肉を持った獣のものだったが、そうでないところもあった。背中から太く、大きな木が生えている。違和感を催す光景だった。

獣が反転する。再び突進してくるつもりのようだ。

「アステル。竜の首が火を吐くみたい」

言い終わらない内に、竜頭から火が放たれた。ちょうど二人の間を裂く軌道。同時に幻獣が突撃してくる。今回も無事にかわすことができたが、二人は幻獣を挟む形に分断されてしまった。

竜の炎によって、森の木々が燃える。リクとアステルは、魔法を発動して熱気と火から身を守る。

アステルは反撃に転じる。彼女の側からは獅子頭が近いが、炎を吐く竜頭のほうが厄介だ。だから、アステルはまず竜頭に狙いを定めた。

幻獣の側まで一気に駆け寄る。気付いた獅子頭が食いちぎらんと迫るが、彼女は紙一重でそれをかわした。軽い身のこなして獅子頭

を蹴り、跳躍。空に身を躍らせる。

竜頭はリクに注意を払っている。がら空きだ。今度こそ、貫ける。だが今度も、それは叶わなかった。

左足に激痛が走る。無理な力で身体を引っ張られる。大きく振り回され、放り投げられた。今更のように背筋を悪寒が走り抜ける。地面に叩き付けられる衝撃。

「うつ……」

必死で目を開け、敵の様子を見据える。

獅子頭が、伸びていた。

獣の身体と獅子頭の間には、蛇腹がある。気味の悪い粘液に塗れた、蛇の軀だ。空中に跳んだアステルを、蛇の軀を伸ばした獅子頭が噛んだのだ。

（反則だつてば……！）

アステルのは心中で毒づく。悪寒。脂汗が意志に反して噴き出て、気持ち悪い。

「アステルっ！」

リクが傍らにひざまづいて、ブルームの枝を伸ばした。アステルの左足、負傷した部位に枝が絡んで桜色の光を放つ。アステルは、どうやらリクの側に放り投げられたらしいと知る。彼の魔法のお陰で痛みが引いていく。

竜頭の口内に、炎のちらつきが見えた。吐火の予兆。

「リクっ！ 火が！」

リクは治療を中断し、アステルの身体を抱えて脇に転げた。間一髪、炎を避けることに成功する。

しかし、二人で地面に転がる体勢になってしまった。

（まずい）

今炎を吹かれたら、二人とも巻き込まれてしまう。かわせない。だが幸いにして、幻獣が火を吐く予兆は訪れなかった。獣は自身が折り倒した木をよけながら、彼らに接近していく。

そのわずかな時間の間に、二人は何とか立ち上がることができた。

リクは幻獣の行動にかすかな違和感を覚えた。

（もしかして）

ひとつの仮説が頭に浮かぶ。冷静にそれを検証しようとしたリクは、しかしアステルの行動に気を取られた。

怪我にも構わず、アステルが再度の攻撃を敢行したのだ。

「アステル！」

慎重にって言ったのに。自分の言葉が届いていないのかと哀しくなる。だが沈んだ気分浸っている余裕はない。

アステルを守らなければ。

彼女はまず竜頭を仕留めるつもりの方だった。だが獅子蛇の頭に邪魔されて、思うように近付けていない。あわや獅子の顎がアステルを捉えるか、というところに、魔法の盾を張って援護する。

やがて再び、竜頭が火を噴く予兆。

今度はアステルもよく見ていたのか、難なく炎をかわした。しかし回避後、体勢を崩したところに獅子頭の追撃を受け、後退を余儀なくされる。

（ やっぱり、そうかもしれない）

リクは先ほど頭に浮かんだ仮説は正しい、と思い始めていた。

竜頭は、炎を連続して吐けない。

今も、獅子頭の攻撃をかわして体勢を崩したアステルに炎を吐けば、彼女は火に巻かれたはずだ。なのにそれをしなかった。

単に幻獣の知能が低いせいで、こちらの際を突くような真似ができない可能性も考えられる。だが、リクはそうではないと判断した。

これは修行なのだ。敵のことをよく観察し、弱点を突けというマザーのメッセージに違いない。

「ああつ、もう！ 炎が邪魔だわ」

リクの側まで後退してきたアステルが毒づく。声音こそ元気そうだったが、負傷も相まって表情に余裕はない。

「アステル。一人じゃだめだよ」

「分かってるわよ……！」

「分かってない。マザーも言ったでしょう？ 協力しないと」

マザーの名を出すと、アステルは黙る。

「作戦があるんだ。乗ってくれる？」

「……何よ」

「竜頭は一度火を吐くと、しばらくは吐けなくなる。だからその隙を突いて、アステルが攻撃するんだ」

「でも獅子頭が邪魔よ」

アステルは、リクの仮説には反論しなかった。アステルも吐火の間隔に気付いていたのか、それともリクを全面的に信じているのか、どちらかは分からない。

いずれにせよ、言い合っている時間的余裕はないので、ありがたい。リクは対策を述べた。

「ぼくが囿になる」

「えっ」

アステルの表情が凍った。

「ぼくが獅子頭を引きつけるから、その隙にアステルがとどめを」

「待つて。だめよ、そんなの」

「どうして？」

「どうしてって。囿ってことは、リクが攻撃を受けるんでしょう？ 危険だわ」

「大丈夫。ぼくのほうが守りの魔法は得意だ。知ってるでしょう？ それに魔力はアステルのほうが強いから、攻撃役はアステルがやるしかない。選択肢はないんだ」

「でも」

「時間がない。怪我だってしてるし、もう森も」

度重なる吐火によって、幻界の森は炎に包まれつつあった。火勢が強まるにつれて、二人も耐火の魔法を強めていかねばならない。結果的に、幻獣との戦闘に割ける魔力量が減少していくことになる。いたずらに時間をかければ、いずれ火に巻かれ、終わりが来る。修行は失敗だ。

「次の吐火が合図だ。行くよ」

アステルはまだ納得しきれていなかった。だが、リクの言葉は理解できる。他の可能性を探っている時間はなかった。

「……分かった。怪我しないでよ！」

言い終わると同時、竜頭が火を放った。二人はそれぞれに身をかわす。

リクは獅子頭めがけて走った。アステルはまだ、動かない。

猛然と突進するリクに、獅子頭は反応した。巨大な口を広げ、リクを噛み砕こうと首を伸ばす。

リクは避けない。

ブルームを掲げ、枝で自身を囲う。

視界一杯に獅子頭が広がる。迫る。迫る。

噛まれた　　が、その牙はリクが展開した魔法の盾に阻まれ、リク自身には届かない。魔法と牙が拮抗して、桜色の火花が散る。獅子は魔法ごとリクの身体を噛み砕こうと、なおも力を込めてくる。揺れる。力に押され、魔法が揺らぐ。

怖ろしかった。

幻獣のとてつもない力を感じる。視界を獅子の口内が占めている。牙が見える。疣^{イボ}だらけの舌が見える。垂れ落ちる唾液が見える。本当に耐え切れるのか。そんな疑念が頭を過ぎる。

だが、すぐに終わる。リクはそう信じた。アステルがすぐに、幻獣の息の根を止めてくれる。それまでの時間だけ、耐えればいい。それまでの、わずかな時間だけ。

リクは自己の内部に集中した。魔力を練る。これまで何度も繰り返した、魔力制御の修行を思い出す。内を巡る生命のうねりを束ね、練り上げて、額の第三眼^{サードアイ}から外界へ。ブルームを通して増幅し、身を守る無二の盾を構築する。

更にリクは、魔法を紡ぎ直す。盾の構造を、最適化する。

身体全体を盾で覆う必要はない。牙が存在しているところだけでいい。他の場所を守るのは無駄だ。牙さえ止められれば、それでい

い。

再構成された魔法の盾は、より強固な防壁となつてリクを守った。牙に押されて揺らいでいた魔力が固定される。不安定に散っていた、桜色の火花が消える。

リクは待った。アステルが幻獣を屠ってくれるのを。

リクが獅子の顎に囚われた瞬間、アステルは思わずそちらに駆け寄りそうになった。だが、獅子頭の口は閉じられない。リクは無事だ。それを見て、自分の役割を思い出す。

幻獣を殺すこと。

今や獅子頭の動きは止まり、竜頭は炎を吐けない。邪魔するものは何もない。あとは思う様、自分の大魔力を叩き込むだけ。それだけで終わるのだ。

好き放題やってくれちゃつて。覚悟なさい。

左足の痛みはもう、だいぶ引いている。リクの治療のお陰だ。だけどあの痛みの恨みは忘れない。それに今、リクが危険な目に合っている。許さない。

アステルは自己の内部に集中する。サードアイから、外界へと。内に感じる力強いうねりがあるがまま、解放する。この状況では細かな魔力制御など必要ない。魔力量をセーブして、扱いやすくする必要もない。彼女本来の魔力を、ただそのままに乘せて、ぶつけさえすればいい。

額から、ブルームの先端へ。

魔力が灯る。緋く、緋く 周囲を焼く炎の中にあつてなお緋く、圧倒的に強く煌く、それはアステルの命の輝きそのものだ。

「あああッ！」

叫びを上げて、アステルは駆けた。竜頭が伸びるが、構うことはない。

竜も獅子もその巨軀も、まとめて貫いてしまえばいい。

ブルームの先端が竜頭を貫く。それでもアステルの突撃は止まら

ない。

肉を貫き、裂いて進む、確かな手応えが返ってくる。幻獣の断末魔が聞こえた気がした。

幻獣の軀の半ばまで突き刺さり、ようやくブルームは停止する。

「死になさいっ！」

貫いただけでは、終わらない。

アステルは先端に集中した魔力を、一気に爆発させた。

竜頭と獅子蛇の頭が、まとめて身体から吹き飛んだ。肉片と血液が激しく飛散し、アステルの身体を濡らす。

「うえっ、きもちわるい……」

動かなくなつた幻獣の軀を前にして、ようやく気が緩んだアステルは、まず初めにそう言った。

「大丈夫？ リク」

「う、うん…… 大丈夫。ちょっと、疲れたけど」

そう言つて笑うリクの表情は、確かに力ない。すこし顔色が悪いようにも見えた。よほど魔力を消耗したのだろう、とアステルは思う。

リクが囁になつてくれなかったら、勝てただろうか。

きつと勝てなかった。左足をすこし怪我しただけで済んだのは、リクがいてくれたからだ。自分ひとりで戦おうとしていたら、もっと酷いことになっていたかもしれない。

すこし、悔しかった。

「ありがとう、アステル。アステルがすぐに倒してくれたから……」

「……リクがいたから、何とかなつたのよ」

いつものように、言葉に棘が生えてしまう。

「いや、ぼくだけじゃ駄目だった。アステルと一緒にだったから、倒せたんだ」

すつと、その言葉はアステルの心に入り込んできた。

リクだけじゃ駄目。

わたしだけじゃ駄目。

二人だったから何とかなかった。

ああそうか、何でも一人でやる必要なんか、もしかしたら、ないのかもしれない。得意なところは自分でやってリクの分まで助けてあげて。不得意なところは、リクに助けてもらえばいいのかもしれない。

そう思ったら、すこし、心が軽くなったような気がした。

「あの」「ところで」

アステルが言いかけると、リクが同時に声を出した。

「何？ アステル」

アステルは俯いた。今まで八つ当たりしてごめん、そう謝ろうかという気になったのだが、偶然リクと同時に発言してしまったのだ。氣勢を殺がれてしまい、言えなくなった。

「いや……何でもない。それより、どうしたの？」

リクは不思議そうにしながらも、自分が言おうとしたことを続けた。彼の話は、どうもそれなりに重要であるらしい。

「うん。いつになったら戻れるのかなって」

「そういえば」「幻獣は倒れたのだから、修行は終わりでは？」

何となく幻獣の死骸を眺めたアステルの目に、異変が飛び込んできた。

幻獣の背には、巨大な木が生えている。その洞から、山羊の頭が覗いていた。山羊頭はのそのそと、洞から這い出ようとしている。

山羊の頭の後には、巨大な翅、節くれだった肢。羽虫の軀が繋がっていた。

翅を大きく広げると、その畸形の羽虫は飛び立った。

「リクっ！」

それは驚くべき速度で飛来した。その先にはリクがいる、しかし彼は反応できていない。アステルは咄嗟にリクを突き飛ばした。

倒れたリクの目の前で、アステルのちいさな体が、巨大な羽虫に掴まれた。あろうことか羽虫は、そのままアステルごと浮き上がる。

「待てっ！」

リクは青ざめて手を伸ばす。アステルもその手を掴もうと手を伸ばす。

だが、指先が触れただけで、届かなかった。

「アステルーッ！」

リクの声は、虫の羽音に掻き消されて、アステルには届かない。

終わっていないかった。まだ終わっていないかったのだ。油断した。

ごつごつした羽虫の肢が、腹に食い込む。羽音が凄まじく五月蠅い。何処に連れていこうというのか？ 羽虫は速度を緩めない。

（何処へ？ そんなの関係ない）

アステルはサードアイを煌かせた。ブルームは手放していない。羽虫は飛んでいるが、それほど高い位置ではない。今ここで羽虫を殺しても、大した怪我もせずに着地できるだろう。

ブルームの先端に、魔力を集中。躊躇わず、羽虫の腹に突き立てた。

ほとんど抵抗もなく、ブルームは深々と突き刺さる。羽虫の羽ばたきが停止する。一瞬の静寂。せいせいしたわ、とアステルは思った。

直後 アステルの全身を、虫の傷口から溢れた体液が濡らした。
激痛。

「ぎっ！？」

予想外の苦痛に、意志に反して悲鳴が飛び出る。体液のかかったところを見ると、しゅうしゅう音を立てながら煙を出していた。酸の体液だ。皮膚が溶け出している。

血が滲んで虫の体液と混じり出すのを見た辺りで、アステルの意識は途切れた。その体が、羽虫の死骸と共に自由落下する。

アステルが虫に攫われてすこし経った頃、リクは視界が歪み、目眩を感じた。幻界が閉じ、元の世界に戻るのだと知れた。

暗闇に閉じていく視界の中、リクはぼんやりと思考した。アステルは無事だろうか。

五話

目を開くと、修行を開始する直前と変わらぬマザーの姿が、まず目に入った。

リクは隣に視線を移す。そこにはアステルがいるはずだった。確かにそこに、彼女はいた。

最悪の予想を実現させた姿で。

アステルの全身は真紅に染まっている。とくに胸から腹にかけてが酷い。服は破れ、肌が露になるはずが、そこにあるのは血と爛れた皮膚であって元の美しい白肌はすこしも見えない。

絹糸のような白髪も血に汚れ、三割ほどは溶け落ちていた。

呼吸は弱い。

こんな姿になってもなお、ブルームだけは固く握り締めて手放さぬ様子が、痛ましかった。

マザーが重々しく、口を開いた。

「……修行は失敗だ」

その宣告を聞いても、リクの心は動かなかった。他ならぬマザーの言葉だというのに、頭に入らず抜けていく。アステル。アステルを助けなければ。それだけがリクの心を支配していた。

「アステルの治療を行う。リク、席を外せ」

「ぼくにも手伝わせてください」

考える前に、そんな言葉が口を突いて出た。

「ならぬ。お前の力では足手まといにしかならぬ」

「それでも!」

「ならぬ」

誰かに腕を掴まれた。

「だめですよ、リクさん。マザーの命令は聞かないと」

レンだった。こんなときだというのに、その表情は変わらぬ笑顔。彼女は有無を言わさず、リクの腕を掴んで部屋の外まで連れて行

く。

「レン！ 放して！ レン！」

レンは答えない。リクは腕を振り解こうとするが、びくともしない。とてつもない力だった。

「アステルさんのことなら、大丈夫ですよ。マザーに間違いはありません」

そう言っで、レンは扉を閉じた。

リクは動けない。

レンの言う通りだ。マザーは間違えない。そして自分に、ああなつたアステルを治すだけの力はない。

ぼくは無力だ。

守ろうと誓つたのに、結局は守りきれず、あんな大きな怪我をさせてしまった。

なぜ？

簡単だ。力が無いからだ。守るための力が、足りないからだ。もう、こんな思いはしたくない。アステルを痛い目に合わせたくない。

力があれば。

どうすればいい？ どうすれば力を手に入れられる？

どうすれば、アステルを守ることができる？

両手を床に突いたリクは、自分がまだ修行用のブルームを手に行っていることによく気付いた。

「 そうだ」

ブルーム。魔女の力。

現在、リクとアステルが創り出そうとしている、魔女の個性。リクは悩んでいた。どんなブルームを創ればいいか。

その答えは、たった今、決まった。

これ以上ないくらいに、はつきりと。

「リクさん。アステルさんの治療、終わりましたよ。命に別状はありません」

どれくらい扉の前で待っていただろうか、不意にレンが扉を開けて、そう教えてくれた。

リクは逸る心のままに部屋に入った。

部屋の中央にはいつのまにか寝台が設えられ、その上にアステルと思しき人が横たわっている。

一見してそれは、アステルとは分からなかった。何故なら全身を包帯に包まれていたからだ。

だが、近付いて瞳を覗き込んでみると、すぐに分かる。これは確かにアステルだ。ずっと見続けてきた。見間違えるはずがない。

「……アステル」

呼びかけると、アステルの瞳はリクを見つめた。

そして、消えそうなほどちいさな声で囁く。

「おに……いちゃん？」

そう呼ばれるのは、一体何年ぶりだったろう。

マザーの下に来てから何年か、アステルが本当に幼い間、彼女はリクのことをお兄ちゃんと呼んでいた。だが、あるときを境に名前と呼ぶようになって以来、一度も呼び名が元に戻ったことはない。

「ステラ」

リクも、昔のようにアステルのことを呼び、その手をゆるく握った。アステルの目が細められる。口元も包帯に覆われているためよく分からないが、微笑んでいるのだろう、と思った。

アステルは、目を閉じた。

「ステラ？」

「大丈夫。眠っているだけです」

レンが言う通り、アステルは寝息を立て始めた。その調子は、安らかだ。

「……マザーは？」

「術式が終わると、すぐに自室にお戻りになりました。今回の講評については、アステルさんが元気になってからとのことですよ」

「……そう」

アステルを守るために、一刻も早く魔女として自立しなければならぬ。そのためには、マザーの教えをしつかり賜うと、リクは気持ちを改めた。もう何度、そんな機会があるかも分からないのだ。包帯塗れの、アステルの体を見る。

リクは思う。この姿をしつかりと心に焼き付け、忘れないようにしよう。

自戒のため。アステルのことを守るために。

+

そのときから、リクのブルーム創作は急ピッチで進むことになった。

どんなブルームを創るか決めたリクの手に、もはや迷いは無い。そのことが創作を加速させているのだった。

「アステル、ちよつと金型に樹脂流し込むの手伝ってもらえない？」

「うん、いいよ。温度はこれでいいの？」

「あ、ちよつと待って。さっき別のことしてから変えてなかった。

えつと……これでよし。いいよ」

「それじゃ、いくよ……」

アステルはもう、すっかり元気になった。マザーの治療は確かに、的確だった。ただ、包帯を外した彼女のお腹には複雑な呪印が刻まれている、アステルの肌がすこしだけ、純粹でなくなった気がしたのが残念だった。魔女的になったと言えば、すこしは聞こえがいいかもしれないが。

リクの勢いに引きずられるかのように、アステルのブルームもまた、完成までの道程を加速度的に縮めていた。

二人ともすでにブルームの核となる部分を完成させ、各人のオリ

ジナル部分の作製に取り掛かっている。設計思想が二人で全く異なるために、本当に大切なところはお互い手伝うことができない。だが、基になる魔法理論や部品の工作手法などは共通なので、協力できるところも少なくなかった。

二人は手を取り合って、ブルーム完成という共通の目的に向かってひた走っていた。

+

「うーん、どうしよう」

アステルは悩んでいた。

もう、ブルーム創作も佳境に入ろうかという頃である。

「何が？」

創作自体は順調に見えていただけに、リクは不思議に思った。何かぼくの知らない欠陥でもあったんだらうか？

「もうすぐ、ブルームができるじゃない」

「うん」

「そうすると、名前決めないとじゃない」

「ああ」

リクは合点がいった。

ブルームが完成したら、命名する必要があるのだ。命名は所有者とブルームを結びつける大切な儀式であると聞いている。

「リクは決めたの？ 名前」

「うん」

即答である。リクは、どんなブルームを創るか決めたときに、名前も同時に決めていた。

「そっか。いいなあ」

「案もないの？」

「ない」

こちらも即答である。そこで即答されても、とリクはすこし困っ

た。

「マザーはどうやって命名したんだろう」

そんなことを呟く。

「> 枯れ箒ウィザード< か……たしかに、気になるね」

「マザーはですね、言霊を利用したそうです」

レンが部屋に入ってくるなりそう言った。二人とも驚いて振り向く。全く気配を感じなかったのだ。

「びっくりした」

「すいません。最近扉が軋まなくなっただけですね」

笑顔のレン。そういえばいつのまにか、扉に油が差されている。

彼女がやってくれたようだ。

「で、言霊ってどういうこと？」アステルは身を乗り出して聞く。

「マザーのブルームは > 枯れ箒<、ウィザードと言います」

レンは持ってきた食事を卓に並べながら、説明を始めた。

「ご存知の通り、ウィザード（w i t h e r d）という音の連なりは > 枯れたもの< を意味していますが、同時に > 大魔導師<（w i z a r d）という意味でもあります」

「ふむふむ」

「意味とは物事の本質です。もっとも大切なこと、とさえはいいでしょう。マザーは似た音の連なりを持ち、されど意味の異なる言葉をブルームに名付けることで、二つの異なる言葉の意味すなわち本質を、ブルームの属性として ひいては、ご自身の属性として獲得しようと試みたのです」

理解不能だった。

少なくとも、アステルにとっては。

「まあ、洒落ですね」

「洒落かつ！」

「ちなみに、> 法器ブルーム< という名称じたいも、じつは上古の伝説に因んだものです。地下書庫に関連書物がありますので、ご興味があれば一読頂ければ」

「ふむう……っ。じゃあ、後で見に行ってみようかな。何かヒントが見つかるかもしれないし」

というわけでご飯にしようよ、と食い気が勝った様子のアステルである。

「はいどうぞ、召し上がれ。今日のメニューは笑い猫のステーキ、女王風です」

レンは相変わらずの笑顔、ソツなくリクたちの日々の世話をしてくれている。

だが、最近アステルには不満なことがある。

「ねえ、レン」

「なんですか？」

「最近、ご飯が少くない？」

「ええ、そうですね」

レンは全く動じない。笑顔のままでアステルの言葉を肯定する。

事実、半年前に比較すると、パンの分量が三分の二程度に減っているのだ。

「そうですね、って。どうして？ わたしお腹へって力が出なくなってきたわ」

「アステル」

リクに咎めるような声で名を呼ばれてしまった。半分冗談だったが、レンが余りに動じないので少し意地悪したくなってしまったのだ。アステルは舌を出しておどけてみせる。

「それはちよつと、よろしくないですね。検討します」

不意に真面目な声で、そんなことを言う。調子の狂う相手だった。

「ま、まあいいけど……何か理由でもあるの？」

「ええ。外では凶作が続いているようでした」

「凶作」

「作物の収穫量が激減することです。生活が危なくなり、飢饉が起ることもあります。飢饉が起きると、民は……」

「いや、知ってるわよ。ただ何となく呟いただけ」

アステルはどことなく傷付いた表情だ。無知だと思われたのがすこしショックだった。

「レンで、いつも外で食べ物とかブルームの材料採ってきてるのよね」

「ええ、そうですよ」

「外って、どんなところなの？」

アステルは、物心ついた頃には既にこの塔の中にいたのだ。外へは一度も出たことがない。彼女の世界は、この塔の中だけで完結している。外のことは、知識としてしか知らなかった。

「人がたくさんいます」

「へえ……」この塔には三人しか人がいない。大勢の人というのがどんなものか、アステルには良く分からなかった。

「愚昧な民衆です。真理を知らず、また探求しようともせず、ただ生きるためにだけに生きる衆愚共。魔女の身で関わっても、百害あって一利無しと言えましょう」

「そ、……そうなんだ」随分な言われようだな、とアステルは思う。笑顔でとても酷いことを言い放っているの、何だか逆に怖かった。「アステルさんたちも、いずれ外に出るときが来るかもしれません」が、魔女たる矜持をどうか、お忘れにならぬよう」

「それは、言われるまでもないわ」

「何よりです」

同じ笑顔でも、今は満足そうに見える。不思議なものだな、とアステルは思った。

「ごちそうさま」

リクたちは食器を置いた。量が多くないので、食べ終えるのも早い。

「お粗末様です。では、今日のお薬を」

最近、夜飲む薬剤の量と種類が増えた。以前は丸薬三種六個、粉薬四種だったが、いまは丸薬五種十三個、粉薬六種、水薬二種となっている。順番に飲んでいけばいいだけだが、数が多くて時間がか

かるようになってしまった。レンが見ていてくれなければ、服薬量を間違えるかもしれない。

その日の夜は、いつもよりも強い痛みが襲ってきた。

二人とも、力いっぱい自分の体を抱きしめて、耐えている。灯りの落ちた部屋の中に、押し殺し切れない苦鳴が漏れる。悪寒。痙攣。体のあるところは触れないくらいに熱く、また別のところは人肌と思えぬほどに冷たい。おぞましい幻覚が見えるが、夢と現の区別もつかないほどに頭は混乱している。

苦しみは、偉大な魔女へ至る道。

ひとつ痛みを越え、悪夢を制することに、魔力は研がれ、磨かれていく　しかし。

「リク……」

アステルは堪らず、リクを求めた。

「アステル」

荒い息で答えて、リクは手を伸ばす。

二人の手が絡み合う。

痛みの元になる熱とは全く違う、優しい温もりが伝ってくる。痛みがすこし和らぐ。悪い幻に溺れてしまいそうになるのを、お互いの手が支えてくれる。

「うっ、えっ」

何度も嘔吐を繰り返す。吐くものがなくなっても更に続く嘔吐感。二人で交互に背中をさすって、苦しい時間を耐えていく。

言葉を掛け合いたい。だけど、苦しすぎてそれもできない。暗闇の中、繋いだ手だけがお互いの存在を確かなものにしてくれる。

やがて二人の体はもっと近付き、重なった。リクとアステルは、抱き合ったまま長い夜を越えた。

何度か失敗を繰り返し、何度も壁を乗り越えて、二人は着実にブルームの創作を進めていった。

部品設計、作製、組み上げ、動作試験。テストに合格しなかった部分を再設計し、また作製・組み上げてテストする。ブルームの各部分について、同様の流れで創作を進める。材料は何を使うか。物理強度と魔法強度、魔力伝導率のバランスをどう取るか。出力と反応速度の二律背反をどう解決するか。

課題はいくつもあったが、二人は協力してそれらを乗り越えていった。

そして。

「　　どうでしょう、マザー」

リクは緊張した面持ちで、マザーの行動を見守っている。

マザーはリクのブルーム、五つ目に当たる試作品を詳細に検めている。点検用の魔道具を各所に当て、反応をチェックし、弱く魔力を流して誤動作の有無を確認する。

一通りのチェックが終わった後、マザーはアステルのブルームについて同様の確認を行った。こちらは実に十を超える試作を経て完成した力作である。

すべての確認を終え、マザーはひとつ、頷いた。

「いいだろう」

その一言に、リクとアステルの表情がはつきりと緩んだ。安堵の表情だ。

「まだ未熟なところも多く残るが、ブルームとして必要な機能は満たしている。これをもって、お前たちが自分自身の手で、初めて創り出したブルームとするがよい」

「　　やった！」

アステルが歓声をあげた。だけでなく、リクに飛びついて手を握り、上下に激しく振り回す。

「やったよ！ やったね、リク！」

「う、うん。でもちよつと痛いよアステル」

「何よ！ いいじゃない、すこしくらい痛いほうがいいのよこういうときは！ 何て言ったって、初めてなんだから！」

アステルは満面の笑顔でまくしたてる。リクはそんな彼女を、苦笑いを浮かべて見つめる。アステルはかなり、興奮しているようだった。

もちろん、リクの気分もアステルに負けなくらい昂ぶっている。初めてだ。ようやく、初めての、自分だけのブルームを手にすることができたのだ。自分だけのブルームは、一人前の魔女の証。マザーはまだ未熟なところがあると言っただけで、一つ大きな通過点を越えたことは間違いないのだ。

今日という日の喜びは、きつと生涯忘れることはないだろう。

大げさでなく、リクはそう思った。

「リク」

マザーが重々しく、口を開いた。アステルの騒ぎもぴたりと止まる。

「はい」

「問う。このブルームの名は、なにか」

ブルームが完成したなら、名をつけなければならない。

真の意味でブルームが完成するのは、命名が完了した瞬間なのだ。

「はい」

リクはたった今生まれたばかりの、自分のブルームを眺めやった。リクのブルームは、身体装着型だ。普段は小さくまとまっており、肩の辺りで身体に固定する。展開時には無数の骨格が格子状に展開し、身体全体を覆う。ちょうど外套のようなシルエツトだ。展開駆動部にはリク自身の骨を混合し、反応速度を高めて素早い魔法行使を可能とした。

だが、このブルームの真骨頂は、二段階に展開できるところにある。

初めに展開した格子外套を、更に解いて広範囲に展開させられるのだ。これによってリクは、魔法の効果範囲を大幅に広げることができる。

広範囲展開と魔法の高速行使を両立するため、外套部分の骨格内には、特別に貴重で魔力伝導度の高い真銀ミスリルをふんだんに使ってしまった。レンに使いすぎで集めるのが大変ですと怒られたのも、今となってはいい思い出だ。

リクが目指した、アステルを守るためのブルーム。その結果が、今ここにある。

自らの想いの結晶である、ブルームの名を、リクは告げる。

「命名します。ぼくのブルームの名は、>星守< フロステラ です」

マザーは重々しく、頷いた。

そしてアステルに向き直る。

「問う。このブルームの名は、なにか」

アステルもまた、自分だけのブルームをじっと見つめた。

アステルのブルームは、人型のシルエットを持っている。アステルの魔力を受け取って自発的に動く、半自律型のブルームだ。ただ、人の似姿と呼ぶには少々厳しいかもしれない。手足はほとんど棒のようであつたし、ところどころから何か怪しい突起が出ていたり、歯車のようなぎざぎざが覗いていたりする。

その設計思想は極めて単純である。純粹に、魔力の増幅力に重きを置いたものだ。

細やかな魔力制御が苦手であるなら、いつそ切捨て、長所を伸ばしたほうがよい。強気のアステルらしい思想と言えた。

構成する主材料には、物理的・魔法的に強度の高い金剛鋼アダマンを使用。元々強いアステルの魔力を更に増幅するから、魔法の反動はかなり大きなものになると予想されるためだ。加工が大変だったのでリクに手伝ってもらった。また、魔力伝導金属には自身の血を練り込み、魔力親和性を高めている。

当初はアステルも、苦手な魔法制御力を補うつもりでいた。だが、

以前の協力修行を境として、設計思想を現在のものに切り替えたのだった。

ちなみに、ブルームが人型であることに大した意味はない、とアステル自身は思っている。レンを見ていたら、何となく人型のものを作りたくなつたのだ。そこにはもしかすると、幼い頃より自分たちの生活を支えてくれた、レンへの感謝や憧憬の念があるのかもしれない。

「……命名します。わたしのブルームの名は、デウスエクスマキナ」

散々困つた末の命名だったが、結局は地下書庫で読んだ雑学の本に書いてあつた、破綻した物語の最後に現れるという神の名からとつて付けた。高尚な理由などなく、何となく格好いい気がしただけである。

マザーはこれにも、頷いた。

命名の完了。

これをもつて、二人のブルームは真に、この世に生を受けたのだ。「二人とも、よく成し遂げた。今より > 魔女 < を名乗ることを許そう」

二人の顔がほころぶ。

「だが、努々忘れるな。魔女の道は遥かに遠く、険しい。たゆまぬ努力と研鑽の末、ようやく辿りついた高みの先に、なお頂きの見えぬ断崖が立ちはだかるのだ。お前たちはまだ、その初めの一段に立つたに過ぎぬ。驕るな。謙虚に学べ。真摯に生きよ。それは高みに至る、必須の条件であるから」

マザーの言葉を一つも聞き漏らすまいと、リクとアステルは集中する。

「これよりは、お前たちも自ら学ぶことができるだろう。塔の書庫にある知識を遍く取り入れるがよい」

「はい」二人はしっかりと頷く。

もう、マザーの導きを賜るのも、これが最後なのだと感じていた。「確かにここに、ブルームは完成した。だが、完璧とは言えぬ。ブ

ルームに、真の完成は無いと知れ。高みに涯が無いのと同じことだ。歩みを止めるな。常に研鑽せよ。何故なら、私たちは」

「>魔女< だからです」

二人は、マザーの言葉を継いだ。

タタリは、二人の様子を見て、満足そうに頷いた。

「もう、私の力は不要だな」

「そんなことは。わたしたちはまだ」

マザーの言葉に思わず一步を踏み出したアステルは、リクに手を掴まれ、立ち止まった。

アステルは唇を噛み、俯く。

リクは手を放した。

アステルだって、理解しているはずだ。

そして、リクの考え通り、アステルは一步下がった。

そう　魔女にとつて、師弟の情など、不要なのだ。

「分かりました、マザー。わたしたちはきっと、マザーに負けない魔女になります」

「ぼくもです」

マザーは首をわずかに動かすだけで、その言葉に応えた。

ブルームが完成した日、歡喜に溢れるはずの二人の夜は、存外に静かなものだった。

二人とも、もうマザーとの別れが遠くないことを、はつきりと感じていたから。

六話

階上が騒がしい。

アステルとリクは同時に、読んでいた本から顔を上げた。

異常事態であった。特にアステルは、このような種類の物音を今までに聞いた覚えがない。眉を顰めて、リクを見る。奇妙に不安を煽る音だった。

リクは本を閉じた。

「上に行こう」

二人は完成したばかりの自分の法器フルームと共に、階段を上る。階上に近付くにつれ、喧騒は大きくなった。人の声のようなものが聞こえてくる。

地下図書室から出ると、そこは一階、エントランスホールだ。外の世界に通ずる出口がある、大きな広間。普段そこから外に出てゆくのは、レンだけだった。リクとアステルは外に出ることを禁じられていた。

二人は、その扉が開いているところを見たことがなかった。

だが、今はどうだろう。

人だ。人がいる。外に通じる大扉は開け放され、そこには大勢の人間たちがひしめいている。そのほとんどは、大人の男たちだ。彼らはみな屈強な体つきをしているが、身につけているものはただ布に穴を空けただけのような、極めて粗末なものだった。

そしてその手には、鍬や鋤、鎌といった農具が握られている。

男たちは、口々に叫んでいた。

魔女はどこだ。魔女よ、出てこい。

好意的な調子ではなかった。恨みのこもった、負の感情溢れる声だった。そして彼らは、奇妙に必死な様子だった。

何故こんなところに？ この人たちは一体、どうやって扉を開けて？

リクの頭が疑問に支配される。彼らの住む塔に普通の人間が、しかもこのように大挙して押し寄せるなど、今までにないことだった。男たちの一人が、リクたちに気付いた。

「子どもがいるぞ！」

彼らの視線が、一斉にリクたちを射抜く。何故か怖ろしくなった。

「魔女め。あんな子どもを攫うなど」

「やはり、野放しにはしておけない」

「許せん」

「狩らねば」

「そうだ」

「狩れ！」

「魔女を狩れ！」

リクは無意識に一步、後ずさった。

彼らは、なんと、魔女を狩りに来たのだ。

「……アステル。マザーに知らせよう」

「うん」

緊張した面持ちで、二人頷く。

そのとき、とつぜん男たちの喧騒が止まった。

彼らは二階に向かう階段を見つめている。

そこには、マザー・タタリと、レンの姿があった。

「はいはい、皆さん、落ち着いてくださいね」

レンはいつそ場違いな、いつもの笑顔を浮かべて階下にやって来た。

「魔女……！」

「使い魔も一緒だ！」

男たちの声が再び、高まる。

「そんなに大勢で押し寄せて。皆さん、何の御用です？」

「何の用だと！」

陽気なレンの声が癪に障るのか、男たちの幾人かが声を荒げた。

「貴様ら魔女のお陰で、ここ最近は凶作続きだ！」

「それだけではない、十年ぶりの流行り病で、大勢の者が死んでいる」

「口減らしのために我が子を殺さねばならなかった者もいるのだぞ！」

「全て、貴様ら魔女のせいだ！」

「お前たちの怪しい行いのせいで、おれ達が不幸になっているんだ！」

何を言っているのか、とアステルは思った。マザーが凶作を引き起こしている？ そんなことは有り得ない。マザーが外界の俗事にかかずらうなど。

八つ当たりだ。

彼らはきつと、愚かな迷信によって、魔女が天災の元凶であると思っ込んでいただけなのだ。

アステルの考えを裏付けるように、レンが彼らの前に進み出る。

「わたしたちは関係ありませんよ。ただあなたがたの運が悪かっただけです。愚かですね。八つ当たりする労力を、他のことに費やしたほうがいくらか建設的だと思いますが？」

「何だと！」

激昂した一人の男が、手にした鍬をレンに向かって突き出した。

レンは避けもしない。

鍬は吸い込まれるように、彼女の首を捕えた。

すると、当たり所が悪かったのか、

レンの首が、飛んだ。

どん、ど、と重い音を撒き散らし、首が転がる。

あまりにも簡単に首が飛んだことに驚いたのか、男たちは誰一人、一言も発しなかった。

「まったく」転げたレンの首が口を開く。「短絡的ですな。本当に愚かです。わたしが魔法人形でなかったら、どうするつもりだったんですか」

残った体は首を拾い上げると、あるべき場所にそれを収めて二、

三度、調子を確認するようにひねった。

すっかり元通り、笑顔を浮かべるレンがそこに居た。

「やはり……化物だ！」

男たちが叫ぶ。

「化物だ！ 魔女は、化物だ！」

恐怖に駆られた叫びだった。

化物とは何事だ、とアステルは思う。

とりわけ男たちは、マザーの容姿に恐れをなしているように見えたのだ。

確かにマザーの姿は、彼らと違う。アステルたちとさえ、異なっている。

マザーの皮膚は人の肌の色をしていない。漆黒だ。

その皮膚はひび割れ、ささくれ立ち、まるで枯れ木のように細りきっている。

ところどころは裂け、そこから白い線のようなものが延び、べつの裂け目から伸びた線と複雑に絡み合っている。

片目はなく、残ったもう一つにも黒目はない。

容姿だけを取るならば、なるほど人外と言えなくもないだろう。だがマザーは化物などではない。ずっと共に暮らしてきたアステルは、それをよく知っている。

化物と言ふなら、いきなりレンの首を飛ばすような彼らこそ、まるで悪鬼のようではないか。

「なんと怖ろしい姿だ！」

「妖しい行い、魔の薬によって、肉体を弄んだに違いない！」

「神を恐れぬ化物に死を！」

「化物を殺せ！」

「魔女を狩れ！」

「殺せ！」「狩れ！」「殺せ！！」

男たちが鬨の声を上げる。恐れを叫びで吹き払おうとするかのようだった。

誰かが、やがて、マザーに向かって走り出した。他の者達もそれに続く。突き飛ばされたレンが転がり、彼らの向うに消えていった。危ない、とは思わなかった。

彼らにどうにかされるようなマザーではない。

だが、不吉な予感があった。

マザーは、自らの死を、予言した。

それはあるいは、今このときのことを言っていたのではないだろうか。

マザーは動かなかった。

先頭の男が突き出した鋤の先が、マザーの身体を貫いたのが、はつきりと見えた。

アステルは目を見開く。リクもはつきりと、その瞬間を見た。

続く男の鍬が、マザーの頭に振り下ろされた。あっさりと、マザーの頭が割れた。

三番目の男が到達すると、マザーの姿は、男たちの影に隠れて見えなくなった。ただ最後に一瞬だけ、倒れ伏すマザーの身体が垣間見えた。

男たちは狂ったように叫びながら、それぞれ手にした武器を、マザーの軀に突き立て、振り下ろし、決して、薙いだ。

マザーが殺される。身体が、どこの誰とも知れぬ男たちの手に、蹂躪されている。

偉大で高貴な、魔女の身体が。

アステルはその光景に耐えられなかった。

「やめなさい！」

叫んで、男たちの間を割り進み、マザーの前に進み出る。

マザーの軀は、既に原型をとどめていなかった。粉々の、炭の塊が散らばっているだけのようだった。それは奇妙に乾燥していて、人の骸のようには見えなかった。

「……マザー」

アステルは呆然と呟いた。明らかに死んでいる。マザーは、死ん

だのだ。

この男たちが殺したのだ。

「……お前たち」憎しみ、怒り、が湧いてくる。マザーを殺した男たちに対する、あらぶる感情が心を満たす。

怒りに任せるまま、アステルは彼女のブルーム、デウスエクスマキナ > 終の機械 < を起動しようとした。

だが、急に聞きなれない声に名を呼ばれて、アステルは一旦思い止まった。

「もしかして……アステル？ アステルなの？」

女性の声だ。知らない声。声のするほうを見る。いた。男たちの合間に、一人の女がいる。当然だが、記憶にない人物だった。

その女性はべつの方向を見て、驚くべきことに、リクの名を呼んだ。

「……リク。リクなのね？」

何故わたしたちの名を知っている？ 当然の疑問が湧いてくる。

問い質す前に、女性は自ら答えらしきものを示した。

「覚えてる？ リク。アステル。お母さんよ。あなたたちの、母親よ」

母親。

なるほど、もしかしてあれがわたしの生みの親なのかと、アステルは思った。

マザー・タタリが自分たちの生みの親ではないだろうことは、はつきり聞いたわけではなかったが、察しがついていた。生みの親は、べつに居るのだと。

同じく声をかけられた、リクを見る。彼と目が合った。

リクは、ゆっくりと、頷いた。

リクは覚えているのだ。生みの母の顔を。アステルは二歳のときに塔に連れて来られたから全く覚えていないが、当時リクは五歳だ。覚えていてもおかしくはない。

「ねえ、リク。アステル。帰りましょう？ まだ間に合うわ。早く

こんなところから出て、私と一緒に家に帰りましょう？　そして、
また四人で、一緒に　」

「黙れ」

アステルはその女の言葉を、一言で切り捨てる。

「わたしの母は、ひとりだけ。お前じゃない」

この女は、マザーを殺した奴等の仲間だ。今更母親面して一緒に
暮らそう？　笑わせるにも程がある。

アステルにとって、母とは、マザー・タタリただ一人。

顔も知らぬ生みの親など、ましてや大切なマザーを殺した者ども
の仲間など、いかほどの価値があるだろうか。

アステルの言葉に衝撃を受けたのか、女性は二の句が次げないで
いる。

するとやがて、細波のように、男たちの囁きが広がっていった。

「リクとアステルとは、ガトーの子か」

「十年前に神隠しにあった」

「魔女に攫われていたとは」

「しかし、確か……」

ある男の言葉を契機として、彼らの感情は一方向に、大きく傾く。

「ガトーの子らは、流行り病に侵されていたはずでは？」

それは、排斥。流行り病への恐れだ。

「……生きているとは！」

アステルの前から、男たちが一斉に引いた。

「あの怖ろしい死病にかかっていた子が！」

「魔女の業だ」

「魔女の魔薬のせいで、生き永らえている」

「……感染るぞ！」

「病が、感染るぞ！」

我先にアステルから離れようとする男たち。足をもつれさせ、他
人を押し、階段から転げ落ちる者まで現れた。

あさましい姿。

愚か者どもめ、とアステルは心中で毒づいた。

だが、そんな中、流れに逆らい彼女に向かって来る者がいる。

先ほどの女性だ。

「アステル！」

濁声で、名を呼ぶな。自分の名を示す音の連なりがこれほど醜く聞こえるのは、アステルには初めての経験だった。

「帰りましょう？　ねえ、アステル」

あまつさえ手を取り、引いていこうとする。

アステルはその手を力の限り、振り払った。離れたところで倒れこむ女。

「醜いのよ」

憎い。マザーを殺した癖に、一緒に暮らそうなどと言うのはどの口か。

暗い感情がアステルの心を塗りつぶす。今度こそ、止めるものはいなかった。

アステルは デウスエクスマキナ > 終の機神 < を起動する。

彼女の額が緋色に煌く。不可視の魔力が デウスエクスマキナ > 終の機神 < に流れ込む。歯車が軋む。軸が回り擦れ合う。潤滑油が全身を巡り、発条が撓んで力を込める。空の骸に血たる魔力が浸み通り、機械仕掛けの歪な人型が動き出す。

デウスエクスマキナ > 終の機神 < の右腕が、人の身には視認できない速度で伸びた。その行く先にあるのは、女の頭。

砕け。砕いてしまえ。

攻撃は、しかし、横合いから伸びてきた何かによって阻まれた。

跳ねる金属音　緋色の火花に、桜色の火花が混じって散った。

「何のつもり。リク」

リクのブルーム、フロステラ > 星守 < が骨格を大きく展開して、デウスエクスマキナ > 終の機神 < の動きを阻害したのだ。

「だめだ、アステル。殺しちゃいけない」

「どうして」

「その人に罪はない」

「なんですって？」

リクの言葉に、怒りが湧く。マザーを殺したのに？

「何を言っているの、リク。こいつはマザーを殺した奴等の仲間なのよ」

「違う。その人は何もしていない」

「同じことじゃない」

「違う」

頑なだ。アステルは苛立ちが膨れ上がるのを感じる。

「邪魔するの？」

「アステルが、やめないなら」

緋色の輝きが、強まる。広間全体を煌々と照らし出す。

「……力尽くでいくしか、ないわけね」

「……残念だよ。それしか方法が、ないなんて」

プロステラ
>星守< を包む桜色の光もまた、その強さを増した。

「……ブルーム壊されても文句言わないでよね!!」

アステルは全魔力を デウスエクスマキナ >終の機神< に流し込む。複雑に計算さ

れたブルームの魔力回路を通して、アステルの魔力が増幅される。

それに呼応して、>終の機神< デウスエクスマキナ の左腕 ヒーム その五指が開きゆく。

そこから、巨大な緋色の光柱が発射された。

純粋な破壊の力を宿した、魔力の光線だ。それは デウスエクスマキナ >終の機神<

の右手を押える、リクのブルームに向かっていった。

リクはブルームの骨格を精密制御。アステルの放った光線の角度、魔力密度分布、それらを瞬時に分析し、回避のための最適解を弾き出す。

結果、リクが骨格周辺に展開した魔力盾は、アステルの攻撃をほぼ完璧に受け流した。上方に弾かれ、目標を見失った光線は霧散する。

「やってくれるじゃない」

アステルは笑みつつ、毒づく。口元に反して瞳は笑っていない。

リクは答えない。そんな余裕はなかった。

アステルの攻撃は大雑把だ。魔力分布も計算されていない、単純な大魔力をぶつける攻撃。だから読みやすいし、回避も容易だ。

だがそれは、アステルが組し易い相手であることを意味しない。彼女の真骨頂は、その超大魔力にある。ろくな制御もなしに放たれるそれは、確かに容易に回避できる。だが、回避したとて、全ての魔力を逸らせるわけではないのだ。魔力で受け止め逸らしている以上、ある程度はこちらの魔力も削り取られる。

「当たれっ！」

アステルはブルームの両腕を使って、魔力光線を乱射する。一撃目で、リクは押えていた デウスエクスマキナ > 終の機神 < の片腕を放してしまっていたのだ。

今のところ直撃は免れているが、回避するだけでもダメージは受ける。何度も攻撃を受けると危険だった。

「そんな適当な攻撃じゃ、ぼくには当たらないよ」

プロステラ 軽口を叩きながら、リクは反撃を試みる。光線の合間を縫って

> 星守 < の骨格を伸ばし、 デウスエクスマキナ > 終の機神 < に攻撃を加えようとするが、いずれも迎撃され、撃ち落されている。

リクの心に、焦りが生まれる。

それは禁物だ、と分かっているにも止められない。

焦りは魔力制御の乱れに繋がる。そして、魔力制御を誤れば、直撃を被ることになる。アステルの魔力量からすれば、一発でも直撃を受けたらそれで終わりだ。魔力制御に気を遣わず戦えるアステルに比べると、リクの精神的抑圧は相当に大きなものと言えた。

(早く、終わらせないと)

プロステラ リクは、 > 星守 < に命令を送る。リクの身体を格子状に囲っていたブルームが解け、骨格の一つ一つが広く、長い形態に再構成される。すこしでも多くの空間を覆うように、それは広がっていった。

「何をするつもり？」

アステルは周囲を見回しながら、眉をひそめた。不安の翳りがその表情に現れる。

リクはブルームを、広間全体を覆うように展開したのだ。今やアステルの全周は、リクのブルームに囲まれている。広範囲への展開を旨とする、リク的设计思想の賜物だった。

「無駄口叩いている暇があったら、ばくの攻撃に備えなよ。どこから来るかわからないよ？」

言葉が終わるか終わらないか、アステルの背後にリクのブルームが伸びた。魔力に駆動されたそれは、常人ならば反応不能な速度だったが、アステルのブルームはこれを難なく受け止めた。

「こんなヤワイい攻撃で、わたしのブルームが壊せると思うの？」

「まあね」

余裕の軽口を叩くリク。皮肉な笑みさえ浮かべて見せる。

その実、彼には余裕がないのだが。

ブルームを広範囲に展開した今、彼自身の防御は限りなく薄い。ここを攻撃されることを思うと、恐怖に身が竦むようだった。

そして、アステルも愚かではない。

「言っ たわね」

熱しやすい性格と言えど、こうも分かりやすい弱点を見逃す程、不明ではないのだ。

「もう、ブルーム壊すだけじゃ済まさない！ 怪我したって知らないからね！！」

アステルは デウスエクスマキナ の両手をリクに向けると、そこから最大出力の魔力光線を放った。煌々と輝く緋色の怒濤。純粹な破壊の顕現。人の身に余る速度で、それはリクに迫りゆく。それこそが、リクの狙いだ。

いま、アステルの注意は全て、リクに向いている。その隙を突く。

リクは プロステラ >星守< を駆動した。展開していた骨格を束ね、ひとつにする。魔力を集中し、槍とす

る。狙うは >終の機神< ^{デウスエクスマキナ} の左腕、その付け根。桜色の光を曳いて、それは一直線に突進した。

光の槍が、ブルームを穿つ しかし。

「甘いっ！」

アステルの絶叫一下、>終の機神< ^{デウスエクスマキナ} の頭部がぐるりと回転した。その眼球に当たる部分が緋色に光り、細い光線を発射する。桜色の槍はそれに弾かれ、軌道を僅かに逸らされた。それだけで槍は致命傷を与える力を奪われ、空しくかすり傷をつけるに留まる。

リクは攻撃の失敗を感じつつも、自らを飲み込む大魔力の奔流を逸らすのに精一杯だ。ほぼ全神経を集中して、刻一刻と変化する魔力分布を解析し、防御効率が最大となるように魔力盾を張り直す。そこまでしてなお、全力のアステルの攻撃はリクに大きなダメージを与えている。

「ふん」アステルは鼻息荒く、緋色の魔力に抗うリクを見た。「いつまでも成長しないでいると思ったら、大間違いなんだからね」

驚いたことに、リクは口を開いた。

「そうだね。ぼくも、同感だ」

「なっ。どういう」

その瞬間、リクを飲み込む魔力の奔流が、半分以下の太さになった。

「えっ」

アステルは驚愕して、自らのブルームを見た。

そこには、左腕を失った、大切な人形の姿があった。

もと左腕があった位置に、>星守< ^{プロステラ} の骨格のうち、たった一本

が伸びている。まさかと思うが、そうとしか考えられない。あれが、

>終の機神< ^{デウスエクスマキナ} の左腕を断ったのだ。

「……どうして」

有り得ない。たった一本では、込められる魔力量にも限界があるはず。金剛鋼で作った腕がこんなに簡単に、折れるはずはない。

理解不能の現象だった。

「勝負ありだ」

威力が半減した攻撃をすぐさま無効化し切ったリクは、静かに宣言した。

「まだよ！ まだ片腕は残ってる」

「聞くんだ、アステル」有無を言わさぬ調子で、リクは叫んだ。

「このまま続ければ、お互いにただじゃ済まない。どちらかのブルームが完全に壊れるまで終わらないし、勝ったほうだって無事じゃ済まない」

「そんなの関係」

「それにね」

聞き分けのない子どもに言い聞かせるような調子が、癪に障る。しかしどうしてか、それは耳を傾けずにはいられない口調だった。

「……ぼくは、きみの弱いところは知り尽くしているんだ」

それを聞いて、ようやくアステルは理解した。

なぜ、弱々しいブルームの欠片程度で、屈強な金剛鋼を砕くことが出来たのか。

「そうよね。リク……わたしのブルームの設計、よく手伝ってくれたもんね」

唇を噛む。

悔しかった。

二人は確かに、自分たちの手で、ブルームを完成させた。

だが、アステルもリクも、まだ未熟者なのだ。完璧なブルームを作り上げたと言い難い。完璧でないということは、何処かに不備がある。外部から受けた力が過度に集中し、折れやすくなる箇所弱点がある。

そこを、リクは突いたのだ。

リクはまだ、アステルのブルームの弱点箇所を知っているだろう。対してアステルは、リクのブルームのどこに不備があるのか、ほとんど知らない。そもそも、仮に知っていたとしても、アステルの制御力では弱点を突くなど出来はしない。

認めざるを、得なかった。

「分かった。……わたしの負け。降参する」
敵わないのだ。リクには。

広間を煌々と照らしていた、緋と桜色の光が消える。二人のブルームが待機状態に戻る。

もう既に、押しかけていた外の民は、ほとんど全員が逃げ去っていた。広間は、静かだ。

リクはひとつ、息をついた。そして自分の行いの結果を見る。

アステルのブルーム。片腕を失った姿。

アステル自身。大切なブルームを傷つけられ、意気消沈した姿。

ぼくは何をしているのだろう、と暗い気持ちになる。アステルを守るために作ったはずのブルームで、アステルを傷つけてしまった。リクは沈んだ気持ちのままに、そもその原因　自分たちの生みの母を見た。

彼女は腰を抜かして、未だにその場にへたりこんでいる。

アステルが彼女を殺そうとするのを、どうしても見過ごせなかった。

アステルの気持ちは分かる。マザーの軀を蹂躪されたのは、確かに気分のいいことではない。いかにマザーが自身の死を予言していたとしても、感情的には受け容れがたい。

だが、あの女性は、自分たちの肉親。生みの母なのだ。

アステルと違って、リクはよく覚えている。魔女の塔に来る前の、父と、母がいた生活を。

貧しくとも、自分たちを育ててくれた肉親を、リクはどうしても見殺しには出来なかった。

あの女性は、また一緒に暮らそう、と言った。

マザーはもういない。これからどう生きるかは、リクたち自身の手に委ねられている。

だから確かに、女性の言う通り、また母と子に戻って共に生きる

こともできるのだ。

リクは、あるいはそれでもいいだろう。

だが、アステルは。

アステルは、憎しみの籠った目で女性を見ている。ブルームを壊された元凶が、あの女性にあるのだと思っっているようだった。

彼女は生みの母のことを何も覚えていない。今この瞬間も、目の前で座りこんでいる女性を、母ではなくただの敵と認識している。そんな状態で、一緒に暮らすなど、できるはずがない。

とすれば、リクにとって、選べる選択肢はただ一つだった。

「アステル。まだ、そのひとが憎い？」

「当然よ。こいつらが来たせいで、マザーは死んだ。わたしのブルームだって、こいつらが来なければ壊れることなんてなかった」

射殺さんばかりの視線を、アステルは女性に投げている。女性は怯えて、肘だけであとずさった。

「殺してやりたい。今すぐにね」

リクはため息をついた。女性には、死んで欲しくないと思う。

だが、女性の言うように、また共に暮らすことなど、できはしない。

リクにとっては、アステルが一番大切なひとなのだ。

「アステル」

だから、彼は告げる。今言える最良だと、彼自身が信じる言葉を。

「ぼくらは、魔女だ。偉大な高みを目指す、愚昧な民衆には及びもつかない探求の徒。だけど、ぼくらの持つ時間は有限だ。当然だ、人の肉体はいずれ滅びるのだから　マザーと同じようにね。だから」

最後に、一度だけ、リクは母の姿を見た。

「下らない俗事なんかは、関わっている暇はないはずだ」

そして、背を向ける。

「　女。ぼくたちは魔女だ。お前たちの言う化物だ。だから、お前と共に暮らすことなど、できはしない。」

……去れ。今すぐに」

言い終えると、リクは階段を上り始めた。

リクの心中に、かつてマザーが告げた言葉が蘇る。

魔女に情は要らぬ。感傷に流され、高みへの歩みを止めてはならぬ。探求の邪魔になるものを捨てよ。歩むために必要なものだけを抱け。常に高みを目指して歩む、それこそが魔女の矜持と知るのだ

彼は今、魔女として生きることを選び取り、不要なものを捨てたのだ。

自分が壊した デウスエクスマキナ 終の機神< の腕を拾い、アステルの手を取って、自室へ戻る道を往く。

「ごめんね、リク。けがない？」

「大丈夫。ばくこそ、ごめん。あとでデウスエクスマキナの修理、手伝うから」

彼は一度たりとも、振り返りはしなかった。

終

「ひとつ言っておきますけれど、マザーは本当の意味では死んでいませんよ」

事が終わって落ち着いた後で、レンはそんなことを言い出した。「えっ、どういうこと？」

驚いたアステルが聞き返す。

「それはですね」

レンの言葉を遮るように、あるいは応えるように、二人の眼前に光が降りた。

霧が凝るような、淡く幽玄な光の集結。乳白色の光。言葉を失い、見入る彼らを置いて、それはある形を取り始めた。

予感に身を任せ、二人は見守る。

人のかたちだった。やがて細部が明らかになる。それは、見慣れた……

「マザー」

アステルが、感極まったように呟いた。

乳白光の人型、マザーは言葉を発しない。ただそれはゆらゆらとたゆたい、暗く沈む塔の空気を照らしている。

幽かなその姿、表情は判然としない。

だが、そのとき、二人には見えた。

マザーが、にやりと 笑ったように。

ついに目にしたことのないマザーの表情に、二人は我を失った。次の瞬間、マザーの人型はどこからともなく取り出した簾

マザー自身のブルームにまたがると、上天に向かって凄まじい速度で上昇し、塔の壁をすり抜けて、いずこかへと飛び去った。

声も出せない二人を置いて、レンは語る。

「滅んだのは、マザーの肉体だけです。マザーは、ついに完成させた長年の研究を、実践したまでのこと」

「……長年の研究」

「そういえば、それってどういう」

ようやく二人は我を取り戻す。

確かにマザーは、そう言っていた。研究が完成したと。しかし二人は、結局その詳細を一度も聞いたことがなかった。

「マザーの研究は、御自身を > 偏在 < させることです」

「偏在？」

「はい。知覚を遍く世界に行き渡らせ、この世のあらゆる事象を余すことなく取り入れること……だそうです。そう、だから、今この瞬間もお二人は、マザーに見守られているのでしょうか」

「……へえ……」

壮大なことだ、と二人は思った。なるほど確かに、そんなことが目的であれば、肉は枷にしかないであろうと納得する。

「お二人がブルームを完成させ、ひとまずは一人前になったのが直接の契機となったようです」

「ひとまずは、っていうのが気になるけど」

「マザーは、ぼくらのことを気にかけてくれたんだね、やっぱり」

「そうですよ。お二人はマザーの、たった二人のお弟子さんですからね」

たった二人の弟子。

その何でもないフレーズが、二人にはとても誇らしいことに思えた。

魔女に師弟の情など存在しない。

だけ。

偉大なる師、> 枯れ箒 < ウィザード マザー・タタリの名に恥じない魔女になる。

そんな言葉を、高みを目指す上での支えにするくらいは、許されてもいいのではないかと思うのだ。

「ねえ、これからどうする?」

「そうだね……」

マザーはもういない。

だから、これからは自分たちの足だけで立つて、歩いて行かなければならない。

わずかに考えて、リクは言った。

「魔女には、高みに至るための、相応しい『研究テーマ』が必要だ
と思う」

「なるほど。確かにその通りね」

アステルは腕を組んで、顎に指をやる。考えるポーズ。

「……でも、どうやって決めればいいのかな? そのテーマって」

「まずは、マザーの研究室に行ってみない?」

「あ、それいいね。いいよね、レン」

「いいんじゃないでしょうか。特に禁じられてもいませんし……と
いうか、お二人の行動を束縛する者は、もう何者もいませんよ。自
由です」

「そっか」

アステルは微笑む。リクも笑った。
自由。

心躍る響きだと、二人のちいさな魔女は思う。

「それじゃ、行こう。リク」

「うん」

「わたしのことも、もう少しだけ忘れないでくださいね。いましば
らく、お二人のお世話をさせて頂きますから」

「当然だよ。忘れるわけないでしょ」

「うん。レンはだいじな 仲間だよ」

「そう言って頂けるとありがたいです。では、改めて。どうぞよし
なに」

二人の魔女は、タタリの研究室への扉を開く。
それは偉大な高みへと続く道の、第一歩だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1424d/>

ウィッチ・ブルームクラフト

2010年10月8日15時44分発行